

ひめまつ
第参号

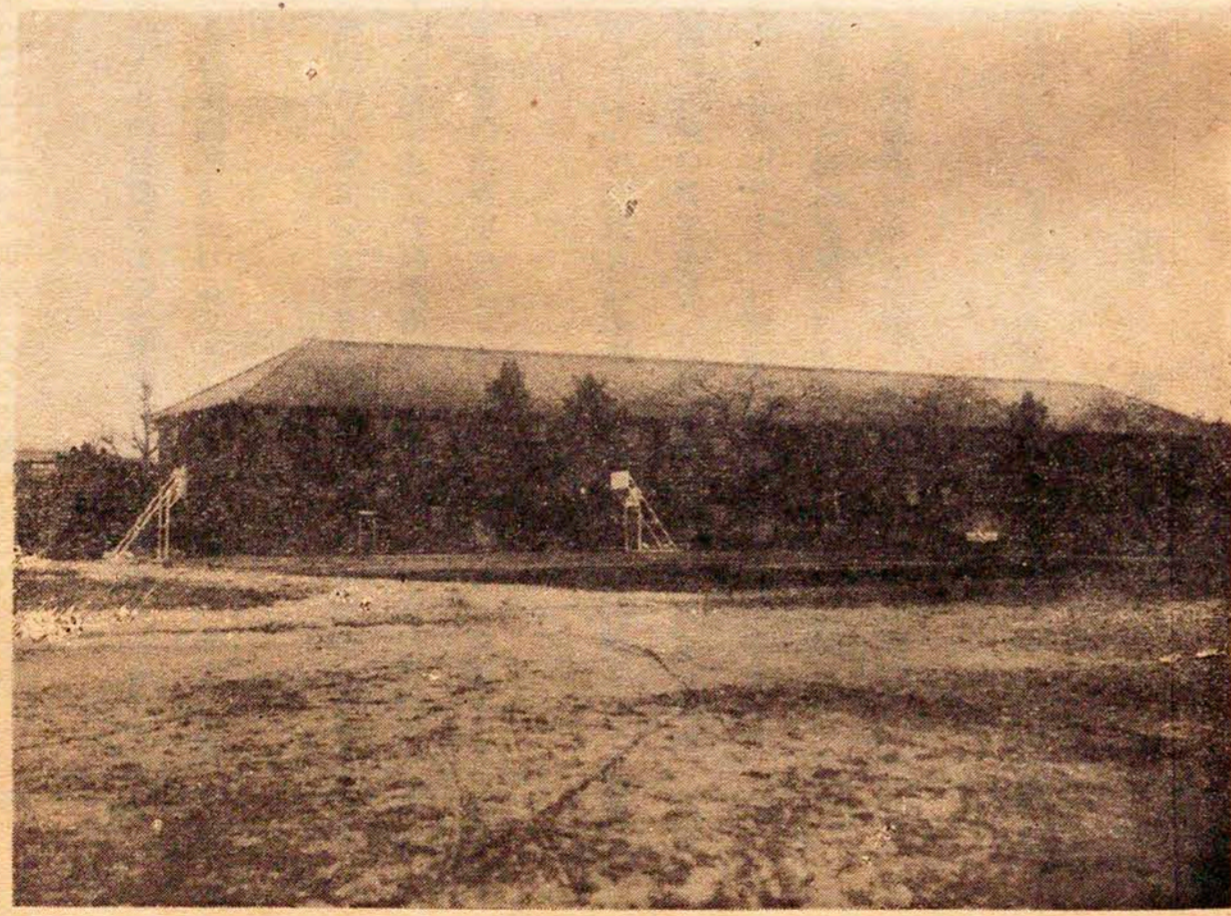
須賀學園校友会誌

目次

| | |
|-----------------------|---|
| 冬を越す蕾の如く……………學園長 須賀友正 | 一 |
| 歌集 | |
| 學舎の窓…………… | 二 |
| 萌えいづる小草…………… | 二 |
| 南天の印象…………… | 三 |
| 句集 | |
| 暖冬抄…………… | 三 |
| 明るい窓…………… | 三 |
| 藪柑子…………… | 六 |
| 詩集 | |
| スポーツ…………… | 三 |
| 早春譜…………… | 四 |
| 創作 | |
| 戯曲「山上の呪」…………… | 三 |
| 卒業の詞…………… | 六 |
| 随感随想…………… | 六 |
| 校友會報 旅行記…………… | 六 |
| 論說・英文・作文教室・其他…………… | 三 |

校歌

- | | |
|--------------------|-----|
| 二荒の高嶺を……………遙かに仰ぎ | (1) |
| 學びの道筋……………まさきくあれと | |
| かたみに誓ひて……………いそしみ勵む | |
| 學びの庭こそ……………げに尊けれ | |
| あはれ尊ふと……………この學びや | |
| 庭面に茂れる……………姫松小松 | (2) |
| 變らぬ操は……………千代万代と | |
| かたみに祝ひて……………いそしみ勵む | |
| 教への庭こそ……………げに芽出度けれ | |
| あはれ芽出度……………この學びや | |



校舎全景

須賀學園文藝部編集

冬を越す蕾の如く

學園長 須賀友正

「ひめまつ」も第三號を重ねた。本學園の成長と共に伸びて行く「ひめまつ」よ、今度はどんな装いで現われるか。いつもながら楽しいものと思う。

第一號から第三號え。その歩みは遅々としているが、社會も學園も、その間新生日本の中軸―民主主義の達成に向つて、大いな苦しみを苦しみ、最善の努力を傾けてきた。まず社會的には、新憲法の實施から經濟九原則にもとづく國家再建過程に至るまで、また學園としては、學制改革による高等學校昇格から財團法人須賀學園の設立という大きい變動の波をくぐり抜けてきた。

かえりみれば、何と困難な道程であつたらう。本學園が今日かくも立派な復興の實をあげ、傳統の名を恥かじめないのは、ひとえに職員諸先生の御努力と學徒の皆さん方、ならびに同志會員各位、P・T・Aの諸氏らの全學一休の御協力の賜物と、不肖學院長として寢食の間も感謝している次第である。

本號に特筆すべきは、本學名物バザーの復活であろう。傳統のバザーを戦争のため中止してから實に十年振りで復活することができ、非常な成果を収めた。これからは引つゞきやつて行きたい。二十四年度としては高等學校、中學校の外に家庭専門部を新設することにした。第一部、第二部に分け共に修業年限は一ヶ年、家庭の實際面に役立つ女子を短期育成するのを目的とするが併せて情操教育も施して行きたい。

さらに、豊かな情操、健全なる常識を養うために、本學園に新學期から教養講座を設けることとした。政治、經濟、社會、文化全般にわたる權威者二十三氏を特別講師に委嘱、これら校外の新鮮な知識人との接觸によつて學徒の社會意識をも高めて行きたいと念願した。

「ひめまつ」第三號と共にまた愛する學徒の一部を校外に送り出さなければならぬ。別離の情忍び難いものがあるが、かの沈丁花―冬を越す蕾の如く強く淨らかに生きよと一言、餞けの言葉を呈して擲筆する。

學舎の窓

學舎の窓にもたれて男休の姿仰ぎて巢立つ日思ふ
 タぐれて霧深みゆく木々の間に街燈の光淡くともれる
 やきみかん吹きく／＼食ぶる指先の黄にそむほどは夜も更けにける
 兩戸開け明け行く空を見渡せば一つ残りて光る星あり
 青々と空晴れわたり何となく心嬉しき日曜の朝
 この一日山仕事せる父上の髪に松の香ほのに漂ふ
 正月や前行く人の高島田姉と書いて聲かけんとす
 何気なくそつとさわれば白ばらのはらりと落ちぬ文机の上に
 眞夜中に鼠飛び出したわむればきら／＼光るその眼可愛ゆく
 薄れ行く空を仰ぎてわけもなく涙にくるゝ野邊の夕ぐれ
 何かしらもとめんとしてもとめ得ぬ此の頃の我の何と淋しき
 つとめより歸り来る足重けれど我家見えれば心はずめり
 はだ寒き風さへ吹きて高杉の梢に一日雨降りそゞぐ
 卒業も近くなりぬと語り合ふ晝の休みの庭の片隅
 たそがれの川邊さまようわれ一人思いにふけり日はくれ行くを
 梅の花一つ二つと数えつゝ君をまつ身の心うれしき
 書くことあまりに多く春の夜にペンとインクをしぼし見つめる
 雨やんで火鉢の炭もひつそりと白くくづれて日曜の午後
 ほと／＼と算の水の落つる夜をなどかききりにこぼろぎのなく
 悲しみも淋しきこともすぎてあれば煙のごとくはかなきものか

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 高 | 二 | 鈴 | 木 | フ | チ |
| 中 | 三 | 鈴 | 木 | ヨ | シ |
| 中 | 三 | 北 | 爪 | カ | ツ |
| 高 | 二 | 小 | 磯 | 良 | 子 |
| 中 | 三 | 大 | 橋 | キ | イ |
| 高 | 一 | 小 | 平 | 美 | 子 |
| 高 | 一 | 大 | 箕 | 輪 | 子 |
| 高 | 一 | 大 | 島 | 靜 | 子 |
| 高 | 二 | 中 | 關 | 秀 | 子 |
| 高 | 二 | 高 | 村 | カ | ツ |
| 高 | 二 | 高 | 松 | 芳 | 枝 |
| 高 | 一 | 茨 | 澤 | 和 | 子 |
| 高 | 二 | 半 | 田 | 伊 | ミ |
| 高 | 一 | 渡 | 邊 | ト | キ |
| 高 | 二 | 野 | 節 | ヨ | 子 |
| 中 | 三 | 阿 | 部 | ト | ヨ |
| 高 | 一 | 小 | 林 | イ | ツ |
| 中 | 三 | 玉 | 田 | ト | シ |
| 高 | 二 | 野 | 節 | ヨ | 子 |
| 高 | 二 | 半 | 田 | 伊 | ミ |
| 高 | 一 | 茨 | 澤 | 和 | 子 |
| 高 | 二 | 半 | 田 | 伊 | ミ |
| 高 | 二 | 野 | 節 | ヨ | 子 |
| 中 | 三 | 阿 | 部 | ト | ヨ |
| 中 | 三 | 玉 | 田 | ト | シ |
| 高 | 二 | 野 | 節 | ヨ | 子 |
| 高 | 二 | 半 | 田 | 伊 | ミ |
| 高 | 一 | 茨 | 澤 | 和 | 子 |
| 高 | 二 | 半 | 田 | 伊 | ミ |

時もう十四年の昔になる、お前のお父様とお母様はお城からお出ましになり諏訪の湖水の波を別け行方知れずにおなりなされたのだよ



戯曲

山上の呪ひ

高二内藤美代子

國枝史郎著「八ヶ嶽の魔術」中の富人の長、杉右衛門がする傳説物語の巻

場所 八ヶ嶽諏訪湖の邊
時代 正親町天皇正年間
人物
 久田姫 十四歳の美少女柵姫の妹は子
 柵姫 久田姫の姉は母で三十歳以上の美しい人
 尼 黒い衣に白いかつぎを着た基督教徒
 宗介 四十歳位柵姫の許婚
 島太郎 老人
 夏彦 宗介の實弟久田姫の父但し劇中に現れない
第一幕
 館造りの古城の一室。ぼくは荒れ果てた室、器具も古び御座も襖も引き切れ塗籠の籠の前に基督とマリヤの像が立つている。それと向いの床の間に武士の畫像が二つ掛けてあり、舞台の真中で久田姫古い物語を讀んでいる。
 久「……それは許婚ある若き女子のいとも恐ろしき罪なりけり（柵姫でそれを聞いて

いる。）
 柵「姫やどうぞ讀まないでくれ、妾は聞きたくはないのだよ」
 久「いえお姉様お聞き遊ばせよ、これがらが面白いのでございますの……許婚のある若き女子がその許婚を恐いとも思わず戀しい戀しい方の許に忍んで行く所でございますもの」
 柵「でもどうぞ讀まないでくれ、妾は聞きたくはないのだよ」
 久「お姉様それではやませうね……（靜かに本を伏せる）あゝ今日も日が暮れる……お部屋が大變暗くなつた。お姉様燈火をつけましょうか」
 柵「妾は此の様な夕暮が一番気に入つているのだよ、もう少し此の儘にしておくれ……お前はさうでもないやつたね」
 久「お姉様妾は嫌いですの、妾の好きなのはお日様です」
 柵「幼い時からさうだつたよ、明るい華やかな事ばかりをお前は好いで居りましたね、夏彦様御氣象のように」
 久「陳氣な事は嫌いですの、このお部屋も……お姉様燈火を點けましょうか」
 柵「……久田姫は立ち上り靜かに畫像の前行き二人の武士を見比べる」
 久「ねえ、お姉様何故此のお二人は斯うも恐いお顔をして向合つて居るのでございましょう、お互の眼から毒を吹き出しお互の眼を潰し合はうとして睨み合つている様ではございせんか、さうかと思ふとお互の口は古い城跡にたつた二つだけ取り残された門の様に固く鎖されて居りますのねえ、深い秘密を持つてながらそれを誰にも打明けまいとして苦しんでいる様に見えること（柵几帳をおしやりと立ち上る氣配をする）」
 柵「ほんとにお前の言ふ通り其の畫像の二人は不思議なお顔をして居るのねえ」
 久「お姉様……（久田姫つと柵に近寄り柵の膝を手を置く）」
 久「この畫像のお二人の中どちらか一人が妾のお父様ではございせんか（柵おどろいた様に顔を上げ久田姫を見るがすぐ何げない風をする）」
 柵「それこそ妾想と言ふものですよ（其聲はふるえで）お前はいつぞやも畫像を見て同じ様な事を言つたのね、あゝお前のその妾想がどんなに妾を苦しめるでしょう、いえお前のお父様は何方にも似てはおいでなさらないのですよ（柵は久田姫の顔をじっくり見守る。そして重い溜息をそつと吐く）お前は此の世に産れた

時もう十四年の昔になる、お前のお父様とお母様はお城からお出ましになり諏訪の湖水の波を別け行方知れずにおなりなされたのだよ

卒業の詞

男体の雪解け始まる頃私達は卒業です。そして幾多の思い出を残して。三年の月日も終りを上げようとしている。本校の隆昌を祈りつゝ。岡田英子 可愛い妹を、學びやに残し私達の集立つ日がまじりました。森田道子 愛する母校よさらば！友よさらば！眞實一路の道を吾はあゆまん。關口久子 うるはしき乙女よ、なつかしき母校よいざさらば！...

知らぬ世界へ。 柴田順子 正しく強くそして明るく愛する母校発展のために。 豊田初枝 三ヶ年と言ふ長い年月も夢の様に過ぎ去りあゝ最後に母校の隆昌を祈る。 永田美智子 日記の最後のページには唯はつきりと「強く生きよ！」と。 岩本スミ 窓邊に描く男体の峰母校を後に集立ち行く。 若目田イネ 二度と歸らぬ女學生時代、あゝなつかしき須賀高校よ、あの窓邊の柳いざさらば。 龜和田トミ子 我が友よ進め勤めよ花咲く道へ。 田中キイ 卒業は梅の香りにみち／＼て友と別れし時は来にけり。 渡邊美佐子 進歩は未知の世界の開拓であり努力なき所に進歩はない。「希望としてそれに應ずる努力」 糸川秀子 いつとせなつかしい数々の思い出。...

き日の紅葉散る。 岡本セツ子 たゞ生る道の眞理と闘精力の偉大さを知つて眞の生き方を進まう。 中島壽美枝 まなび舎の窓春にしてわれ集立ち行く。 窓邊に見えし櫻木の蕾ふくらみ今集立ち行く。 佐藤イヅ 幸福をうんとつかんで集立ち行く私達け立派な社會人とならう。 岩上もと子 入學して卒業まで早いで早いでしよう。 福田トキ 樂しかつたこの年迄。 黒崎サタ 流れる様に過ぎさりてこの年月、今はもう卒業、さようなら。 坂本伊子 この年も夢の如く去り今は別れ行く諸先生後にして社會の荒波にままれ行く我。 岩原モト わが友は草の花ぞのにあわれ行くなり朝露にぬれ。 長井照子 温床の様な學舎を後に亂れ来る冷たき現實の道を歩む。 長島セツ 私は第一に健康でありたい、誰しも願うとして平凡な幸福の道を。 齋藤富子 思出深き學舎の愛する母校後にして今や我等は集立ち行く。 吉澤マサ 母校の発展を祈りつゝ自己を省みて今や社會の人となる。 釜井トシ 窓際に立てばゆつたりとして我が卒業をまつ。 内藤ヨシ江

懐かしい母校よ又逢う事を祈りつゝさようなら。 若林フク いくとせを學びし母校を出づ新しい夜明を告げる自由の鐘をきこつ。 伊藤たい 恩情追憶となりて我暗き現實を歩む。 福田キヨ子 我友よ新たなる門出希望の道へ数々のなつかしい思い出を抱きいばらの道へ。 小堀サト子 なつかしき母校、共に學びし級友よ、いつの別れさらば。 八木澤ミチ 文化の光、文明の光を求めて行から、早學校生活過ぎて行く。 齋藤マキ あの窓邊今日の光りを夢みつゝ。 野尻さと子 夢のような五ヶ年、前途程遠し、希望を空しくするなかれ。 高橋キイ 光輝ある本校に入學したのもつかのま今は友と別離の悲しみ、今はたゞ安全な前途を祈りつゝ。 高橋久代 卒業も目の前に迫る、友の顔別れと悲しさ。 沼尾綾子 濁流の如き波濤が早待つて居るのである。 あゝ懐かしの母校よ友よいざさらば。 池田美代子 樂しかつた校舎、そして数々の思い出も今は夢に早五ヶ年の月日は流れて行く。 田代芳江 男体を背に、此の五ヶ年も夢の様に過ぎ去る、變らぬ姿我が母校よ。 枝野テル 一女性として社會に強く踏出そう。 橋本幸子 追憶に満ちた學校生活も早や學窓を集立つ

て行く、最後に母校の発展を祈りつゝ。 橋本アイ 母校の発展を望み乍ら、我は去り行く。 半田トキ 後に残る下級生に幸多かれとお祈り致します。 澤田和子 各々の來たるべき明日を見出すために、今日よりも進んだ吾々を得るために働く事だ共に學びし我が友よ、今日が別れかいざさらば。 青柳タミ 幸多き學窓を後に私達は未知の世界へ、それは唯神のみぞ知る。 菱沼ヒロ 此の寒い學舎よりあと幾日か立ち去ろうとして私達！ 林利枝 二度とかえらぬ女學生時代も遂に終れり、最後に母校の幸福を祈りつゝ。 直井マサ子 五星霜への追憶は限りなく湧き出て来る。無盾の多い社會の中に淡い光を求めて。 木下キク 四ツ葉のクローバー胸に、社會の荒波を乗りこえて！ 吉澤登美子 雨の日、風の日共に別れし思い出の胸に今樂しき母校から集立ち行く我身。 中村キナ 別れてみればなつかしき、學びの窓に思い出はつきない。 片桐良子 思い出多きこの校舎よ、永久に榮ある様我祈る。 御子貝トヨ 卒業やいつと師のおん身にしみ涙にぬれし明日は別れぬ。 塩井亮子 梅が香と共に涙ぐみつゝ我集立ち行く、母

校の発展を祈りつゝ。 岡田弘子 新しき年と共に新しき人生の第一歩踏まん高松芳枝 五ヶ年間の女學生時代に早くも別れを告げなければならぬ、皆さんお元氣で。 高橋好子 窓につもれる幾年早やすぎ、寂しき卒業。たえず一つの仕事を成し遂げるために、長い様で短かい三年を過ぎて来た。 田代友子 過ぎし幾年の思い出、友と語りし希望の門出を、夜毎の夢に希望は燃える。 人見ミキ 二度と歸らぬこの學舎生活もさらば、母校と過ぎ去り。 藤沼サヨ 共に學びし五年も走馬燈の如く走り、世の荒波に集立ち行く我身。 田村君代 卒業、そして社會への一年生希望は輝くしかも波高き社會え。 大森光枝 若芽もえ出する頃なれば春吹く風に送られ冷たき社會に出で行く我は。 齋藤シツエ 母校よさようなら、私の魂は山の彼方の安住と幸福とを求めつゝ。 加藤富美子 共に學びし我が友よ、そしてなつかしき學舎も、二度とかえらぬ思い出とならぬ。 須藤キエ 卒業、小さき乙女の胸に、何故か悲しい言葉。 菊地千枝子 喜樂を共にした友と別れ、今はたゞ前途の不安にかられている。 齋藤悦子 卒業...早くも五年、在校生と母校の幸を

願う。 渡邊幸子 社會に貢献出来る人間になりたい、懐かしき母校の幸を祈りて。 館野愛子 なつかしき母校を集立つ悲しさ、はるかに友の幸を祈らん。 渡邊知子 追憶に満ちた母校の女學生時代も、はや幾年。 齋藤敏子 榮えある母校よ、師よ、妹よ、いざさらば五年間の思い出は行く雲の如く、我強く生きなん荒波の中を。 小林ウラ 春風と共に集立つ私達、社會へ出て何をつかもうとしているのである。 手塚矩子 三年は早過ぎ去る。我等社會人になるも永久に師の恩忘れず。 中村キミ子 幾年か希望にみちし學舎、かいりみれば數限りなき思い出。 名坂コウ 幼き日より今日迄を共に學びし學友と今は別れの時ぞ来る。 松倉君子 深い追憶にひたりながらさようなら。もう一度さようなら。 手塚ツネ 或る一つの夢を追つて来た一羽の小鳥が今古巣を立ち去つて行っている。 中山静江 句やかに咲き出でしスミレの花のごと、友の心も永久にかおれよ。 萩原ミツ 我が門出喜び祝う師の心、別れも共に忘るな面影を。 小池ミチ 聽能コンクール運動會、秋のバザー等みんな

な楽しい追憶となる事でしょう。 零節子 幾年もの教を受けし學舎を、出でんとすれば心ひかる。 渡邊清 過去をたどれば三ヶ年優しき母校、樂しき母校よさらば。 阿部フジ 庭の枯木に花咲きて過去の思い出を胸に乘せ今は荒野に集立ち行く。 秋山侑子 あゝ楽しい五年、夢の様な五年、お別れの五年さらば。 飯塚トシ 風氣樓の如く映りては消ゆ思い出の数々、師の君に幸あれ、師の君よ、學舎よさらば猪野園子 何事も胸におさめて數多き過る年月なつかしむなり。 岩澤ミツエ 共に學びしこの窓に今別れ行く、いざさらば荒波に向つて雄々しく乗り出します。 上野ヒロ子 卒業を目前に控え見るものはみな懐しき母校よ永遠に榮あれ。 大塚タネ 在校の昔様母校発展のため精進されんことを希望致します。 大橋キイ 糸柳なびく思い出の庭なつかしき母校よさようなら。 岡田キヨ 想い出される松島旅行、植釜の樂しき日頃の苦勞も打忘れたあの日は。 落合キン 五年も早や過ぎ去り先生よそして又學びの

友よ御健康を祈ります。
 小野 サキ
 樂しかつた三年間、私にとって一番思い出
 多き學校生活でした。
 菊池 多喜子
 思い出多き此の學舎よ永久に榮あれ。
 余川 キミ
 別れても思い出しましよ師を友を。
 黒瀬 イツ
 刻々と迫る卒業の日、深き師の恩親しの友
 よきよなら、又逢う日迄。
 黒崎 節子
 暮れ行く冬の寂寥と共に東立ち行くなぞか
 歩調は亂れつ。
 小池 スミ
 三年は早や過ぎにけり、學びの友よ先生よ
 母校よ永久にさらば。
 小堀 美佐子
 學びの天井なき教室も思い出のアルバム
 の一ツとなりぬ。
 齋藤 鈴
 母校よよきなら、お別れしても世の中の
 有爲な人間になる機遇適致します。
 小谷野 好子
 刻々来るべき日は近づいた、友と先生と語
 り合つたあの日あゝ夢の襟だ。
 齋藤 律子
 数々の懐かしい青春の思い出をのせて刻々
 と時は流れ行く。
 砂川 孝子
 希望と憧れを胸にいだきて東立ち行く富士
 の裾野の道遠く幸來むと我は待つ。
 鈴木 フヂ
 新しい人生の第一歩、偉大なる希望もて我
 は進む。
 鈴木 峰子
 通ひなれし學舎に早や卒業の日も近づきぬ
 岡本 キタ
 母校を離れても日々思ふ師の恩、友の恩、
 學窓時代がなつかしい、あゝ過ぎし日が、
 竹原 ヤイ

今日は嬉しい希望の門出、皆んな笑顔で母
 校を巣立つ。
 高橋 美智子
 三年も早過ぎ去りて卒業と聞けば懐かし
 この窓邊。
 高松 ナエ
 住みなれて古巣を後に飛び立つひな鳥強く
 生き抜きます御安心下さい。
 高山 君子
 樂しかつた學舎も今はお別れ、母校の皆様
 須賀高發展のためお勵み下さい。
 高田 セイ
 母校の隆盛と皆様方の幸多からん事を祈り
 ます。
 内藤 ミヨ子
 母校の幸運を陰乍ら祈りつ。
 中根 律子
 時の流れは永遠に歸り來ぬ樂しかつた學び
 やそして師と友に別れを告げて巣立つ初戀
 卒業の歌を唄い、限りなき淋しさを胸に秘
 め校門を出る氣持何んか響えよう。
 野中 キヨ
 二度と返らぬこの教室この窓きよなら
 「歲月人を持たず」長いと思つた學校生活と
 お別れし實社會の波に入つて行く私達。
 橋本 三子
 嚴肅な永遠の存在の前に孤獨なそして刹那
 的な流轉の運命と東立ち行く一抹の悲哀。
 橋本 三千代
 廣き知識をもとめんと荒海めがけ我東立ち
 行く。
 原 ママ
 あゝ樂しかつた女學生時代の修學旅行は
 う二度とは來ぬ。
 半田 正子
 今日こそは淋しき顔をうなだれて學びや後
 に立て行く姿。
 増淵 絹代

年月の流れと共に数多き思い出のこし社會
 に巣立つ。
 増淵 美代子
 夢の様に過ぎし三ヶ年...何か嬉しいやら
 淋しいやら寂寥たる氣持で巣立つ私達。
 谷田部 セキ
 旅立ちて永久に忘れじ師の恩友の恩。
 屋代 順子
 學生時代を夢みつゝ入學した理想の五年早
 や過ぎ荒波の社會に巣立ち行く。
 山崎 シゲ子
 五年の間樂しみ悲しみを共にした先生、友
 よ、校舎よよきよなら、學びの友よ幸福を
 祈る。
 柳 美佐子
 みとせが夢間に過ぎて卒業の時いたる。
 若松 里子
 叱られて何時か夢となりぬらむ暮れ行く春
 の空をながむ。
 和地 喜勢子
 櫻花散る頃母校を後に社會への第一歩を踏
 み出す。
 渡邊 ノリ子
 たのしい女學生時代も夢のように過ぎて、
 冷たい社會の中に旅立たなければなりません。
 手塚 マサ

晴れの卒業を心から祝願いたします。卒
 業後の心構えはすでに出来ていると思いま
 すが、きびしい現實に挑んでかしく生き
 抜いて行かねばなりません。夢のような理
 想ほど儚く危険なものはないでしょう。
 青春期は自己を求めて自己を失ひ易いもの
 それはいつまでも少女時代の甘い夢の中に
 自己を求めようとするからです。青春時代
 北島 貞男

は現實に立脚した實踐躬行の中に自己を求
 め自己を確立して行くべきであると思いま
 す。私はそう言う意味で卒業後は社會人と
 しての調和性(廣義の社交性)を身につけ
 ること、家政の能率的な處理に心を砕くこ
 とをお奨めしたいと思います。その地味な
 努力が結局最後の幸福をもたらせましよう
 新井 キク
 集合離散は世の習とか、歲月は容赦なく
 またしても皆さんを送らねばならないその
 日の預言がかすかに近づいて來ます。誠に
 「袖ふり交わすも他生の縁」とやら、まし
 て五年乃至三年のゆかり送別に際して惜別
 の情をどうすることも出来ません。想ひ出
 の修業旅行。参加された方はよく知ってい
 ましよ。塩釜港で皆さんは大好き物の冷菓
 に涼をもとめていられたとき私達引率者は
 あの爺さまと押問答、今冷静にかへつて考
 えれば愚にもつかないことですがあれは安
 全に彼岸への輪送を希ひ願つたからのこと
 間近に雄々しくも船出しようとする皆様達
 が恙なく幸福の彼岸に到達されることを謹
 念港のあの氣持で祈つていきます。何卒「強
 く！明るく！正しく！」をモットーとして
 船出して下さい。母校や先生方はあなた方
 の將來をいつまでも見守つていきます。では
 すこやかに。
 北山 シゲノ

小品

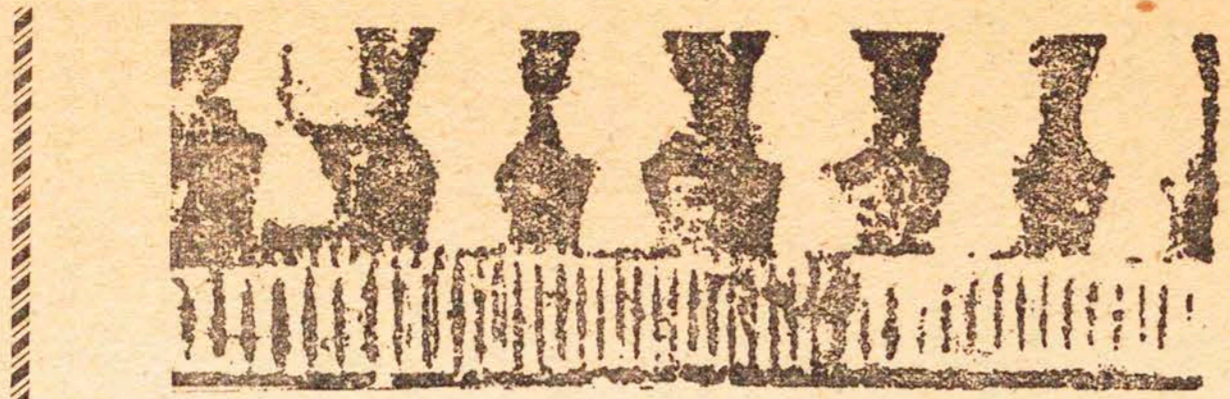
去り行く人々

高二 野尻さと子

或る年の二月初めの頃、私は東北線
 新橋發の十六時の汽車でS町に向うため
 驛へと急いだ。雪がさかんに降つていた。
 時計を見ると十分前である。あわて、ホ
 ームに出た。周より幾分高めになつて
 居る。こゝは雪の上を吹き荒れた風が、
 顔、足、手、どこもかまわす吹き、彼等
 は又どこかへ去つて行つた。樹に積つた
 雪が人の通るたびに風の通るたびに可愛
 い音を立て、おちる。ホームに立つて居
 る人達は皆寒さうに、オーバーの袴を立
 て、時間のたつのをまつていた。しかし
 なか／＼汽車は入つてこない。時間を待
 つ人々もいずれ風と同じ存在であろう。
 用事のため集り又散つてしまふのだ。
 待ちあきた私はこの頃はやりの「ヨリ
 ドリ」十圓の繪本を買い、たいくつをま
 ぎらわした。そんな事をして居る中に汽
 車がホームにすべりこんで來た。席をと
 ろうと、あわて、汽車に乗つた。私は急
 にふるえが來た。寒くてふるえるのか、
 うれしくてふるえるのか？ ふるえをとめ
 ようとあせつたがなか／＼とまらない。
 しかたなしに今買ったばかりのおもしろ

くもない本を讀んだ。そんな本を讀んで
 居る中にいつの間に着いたか上野に來た
 らしい。通勤者が多いこの驛では、だち
 まちにおすな／＼のおもひも合い、坐つ
 て本など讀んで居る私とあまり差があり
 すぎると思つたので本をふせた。前を見
 ると、年頃二十四五になる女がトランク
 を下にして其の上に乗つて何か懐かしい
 様子で車窓を見て居る。實際はこの私こ
 そ何年振りでこの景色を見るのだつた。
 私の想像する處、この女は何年振りか
 故郷へでも歸るのであろう。案外あかぬ
 けのした美しい。それよりも清い感じの
 する女である。繪の方が多し本は、見あ
 きる程見てしまつた。後S町迄約二時間
 四十分程ある。どうしようかと、迷つた
 が結局は讀み終つてしまつた本を何回も
 く／＼くり返し外を見たりして、あの景色
 と六年も前の卒業に、ある人と「きつと
 お手紙だけは下さるわね」と約束したこ
 ともあつた。今はあの人もどこか嫁つた
 て幸福に暮して居るかしら、私の運命は
 卒業前から決つて居たのね、貴女は私に
 「貴女はどこへ行くと尋ねられたとき
 私は答へなかつたわね。とつてもはすか
 しくお話し出来なかつたの、でもあの
 時代は夢の方が多くて今の私とは問題に
 ならないわ。母といつしよに卒業の時に
 身につける色々な品物など買ひに銀座ま

で行つた頃は樂しかつたわ、あのKさん
 も東京に憧れて居たけど、どうしたかし
 ら、Kさんなんかも美しくなつたらうな
 ど、卒業の時のKさんを想ひ出しちまう
 の、螢の光り、私は今でもあの歌を歌ふ
 と涙の一つ二つ出ることよ...。小山附
 近まで私は一人想ひにふけた。いつの
 間にかトランクの上の女は私の隣りに腰
 をおろして居た。本をだしたりして何に
 やらうれしそつたが、私にはわから
 ない。一人でなにか考へて居る様である
 私はS町がほど近いので、おりの用意を
 してデツキまでくると、さつきの女がこ
 れ忘れ物と言つてもつて來たのが十圓の
 本である、につこり笑つて私に本をわた
 してくれた。私は唯ありがとらしく軽く禮
 を言つた。私の内心はそうでもない、あ
 の女がたいくつをすと思つたから、私
 はわざ／＼おいて來たのだつたが、心の
 清さがあゝ顔にまであらわれるのかと
 つくづく感心した。
 朝の通學
 高一 大塚 智子
 「すみませんどなたも御願におつめ願います」
 すべる様にホームに入つた來た汽車に乗るが
 早い例の口上、車内の日生「冗談じやない
 もう一ぱいで押したつて入れないよ」成程む
 つとする人息にすいていけるのは唯頭の上だけ
 棚の上はヨツクや鞆でぎつしり、兎もすると



頭上に墜落し、と云つて乗手は大勢だから押しつ押しされつ中に行つて行く、車内のしめ顔を外に「混むのはお五様きつても我慢して下さい」と云う者「あのうつめるのがいやな人は乗らない方がよいわ」等とさんざ口に云う。

「そう／＼やきになつておさんでも今入りますよ」と忽ち苦情、ギヤア／＼と上げしく赤ちやんが泣き出す。押されて足ばかり後で人に寄り掛かつてやつと体をさゝいでいる所へ又押されるのだからやり切れな入口の人がばた／＼と倒れる。大きな人の間に挟まれたA子おこつた様「ちよつとその邊の學生さん、力の有る所を利用してもつと入つてよ」と男學生をにらみつける苦笑のY生「何しろ今は配給米だからね、うは思ふ様に精が出ないよハッハ」

R「おいそんなに押すなよ誰だ」
M子「貴方だつて乗る時はもつと押したんでしよ」
R「いやどうもすごいなあ」
S子「面白半分には押ししている人なんかいませんからね、少しは協力して下さいな」
X「うわア、おつかない」
B「云われつちやうな」
Q「おい君さうあつさり恥を擡くなよ、みんなもないぞ」
一同聲を揃いでどつと笑ふ。

折から「發車——」學生達を乗せた列車は汽笛と共に、I驛を去つて行く……

夕 映 元

高二 永岡 芳江

誰れでも美を感じないものはない。私はこの美の中で、四季折々の夕映元の景色が好きだ。特に秋の夕映元。一秒一秒の動きに、私の生命を込めて眺め入り度い程素晴らしい。しかし他の季節の夕映元もそれ／＼捨て難い趣と懐しい連想とがこもつている。

昔から藝術では、壯麗な中に明日への希望を持つた夕方の静けさを詩に音楽に繪畫に讚美と敬虔を以つて美しく表現した。然し如何に一時の美を捉え得たとしても、二度と同じ色に輝くのを見られぬのが此の美しさの特徴である。

其の夕映元の色は次の瞬間には全然異つた美がまに變つていく。之等は到底繪畫にも文にも現わす事の出来ない。一刻々々が移り行く人生の夢であり幻である。これは、唯夕暮の一時を慰む最大の瞬間に感じて居る人達のみに與えられたものである。それ故に盡きぬ興味が感じられるのかも知れない。

眞白な雲や千切れ雲が時ならぬ空の殿堂を形造り、まばゆい光を投げかけている。子供時代の記憶の底にも夕映についての印象が残つている。小さい頃の夢と空想現在

ひるがほの花

高一 櫻井 玲子

おとめ子のひそかにつきしため息の空にのこれるひるの月かな
青空にゆるやかにほの白く浮くはかなひるの月。遠い日の思出のようになつかしいひるの月。それは何時からか私の心からはなれなくなつた。老さびたさきの住ひの裏の茶晶のすみに、まひるの夢見るほの白いあはれなひるがほの花の傍にたゞずんでひそかに涙する私の目に、うす白いひるの月が悲しくなつてくつ／＼と。それからひととせ暗いなやみの底から重い頭を上げてなやましく仰いだひるの月。あきらめの心かなしく、さびしさのやりにまなく、ひそかに胸の思ひを語つたひるの月。再びよみがえつた幸をいだきつゝ遠くいます病院のきみをなつかしんで日毎仰いだひるの月見残したゆめのようにはななくえがくまほるしにも似たひるの月。

淡くかそかにそなたになつかしいひるの月の世の幸のようにはかないあわれ深いひるの月を幾人の乙女が私のように悲しみつゝなつかしきつゝ仰ぐ事である。

自然と幸福

高二 稻葉 隆子

初秋も過ぎ去つて、物靜かな晩秋となつた。秋と言うものはすべての物が何となく哀愁を抱いている様に響いて来るので、私に取つては秋は遠い處に

感じる様なしみん／＼とした喜びはなかつたとしても、幼い心を高める嚴かなものが感じられたのだ。燃える夕日に向つて、「こら来い」「油揚げやるから降りて来い」と長い竿を持つて、飛び廻つたことや遠い路を夕日を見つゝ泣き／＼歸る時のせつなさ、幼き頃の此等の思い出が胸の中に返いつてくる時、幼い頃の歡喜が今もなほ温い血潮となつて体内を流れるのを感じるよすがとなつている。秋の夕映を私は又しみじみと味わひ度いと思う。

孤 獨

高二 市村トミ子

淋しい、何故こんなに淋しいのだろう。なぜか自分ではわからない。今迄私は孤獨程美しく清らかなものはないと思つた。私は淋しさ故に孤獨が好きだつた。しかし孤獨になつた時の淋しさ……唯溢れる涙……赤い夕陽の空をじつと見つめていくと一羽の鳥が悲しそうに彼方へと飛び去つて行く。あの鳥も一人なのかしら。「お前も淋しいの」でも私はもつとお前より淋しいのかも知れない。こう一人で口ずさむ時

小路なる古城のほとり
雪白く遊子悲しむ……
こんな歌が浮んで来た。あゝ、孤獨程淋しいものはない。泣いても慰められるものなら泣け／＼。でもやつぱりだめなのだから。ふと見上げると、はや夕日は沈み何時の間にか月が出ていた。その月をじつと見つめていくと、「いゝえ、駄目じやないわ

雨の中の石

高二 森田 道子

静かな夜、屋根を叩く雨、その恐しい音それを聞きながら寂しく厭な氣持に老人はなりながら娘の事がこだまの如く戻つてくるのを感じるのだつた。

「め／＼よく眠つた」と老人は一人言を言いながら、眠むそなた目を雨戸のすゝけた隙子に、やせ衰えた手をさしのべて「す」と音のしない様に開けた。地味な普通の單衣物を着て、長い廊下をよ／＼とした足どりを雨戸に向つて歩つて行く。

雨戸を開いて目を動かさず、じつと大きな石を見ながら静かにひとり言をいう。「私が奇異な世界に生れ、自然に生命を續けて来た事は」と、自分が冒險を働いた過去を後悔しつゝ、雨の中の石をじつと離さず見ている。「生命の老いゆくのを考えると娘のことばかり氣付かわれる。それかわしに悪かつた。わしは深く神に對して頭を下げなければならぬ、今迄の生活が冒險であつた事よ、娘、わし今、後悔して居る。又この事が世に聞えたらもうわしの威力は奪ひ取られてしまふ」言葉を引き、なやまし

き日をいつか故郷の空に向け目に涙さえ一ばいに浮べて物靜かに又續ける。「あゝ、わしの永劫がわしの周圍にある永劫、永劫あゝ恐しいこの永劫にはきつと自分は恐しい事に戦わなければならぬ」と語りながら雨戸から見る石を淋しく、悲しくなおも見つめる。

この老人には娘があり、この娘の母親はこの世を去り、それというは老人と二人仲良くくらし娘も育てきたのだが、ふとした事から老人は妻が他の人と仲良なりつゝある事を耳にしたので怒りのあまり罪のない妻を疑い、その上に死と云ふど底におとし置つたのだ。その娘は母親の事を大きくするにたがつて絶えず老人に聞くのであつた。その聞くたびに自分の身がますますあぶなくなるのを感じて雨の夜、娘を妻の所に追い歸してしまつたのだつた。娘はしかし家を出ず庭の大きな石に身をかくして、そしてそこで烈しい雨の降るひと夜を明かしたのだつた。

「石よ、石よ、雨の中にあつてさぞつらい事でしょう。石よ、烈しく降る雨に負けてはだめだぞ、石よ雨が石にあつたからとて身を退いてはならぬ、雨などはじきとはしてやるのだ、石よ、我が娘を守つてくれでないともわしはこれから生命を續ける事が出来ない。石、おまえは、娘を」と云う。

石は茫然として雨の事など知らぬ顔で大地に坐つていた。

雪の朝

高一 坂本 住

薄い／＼紙をしく様な音が目醒めかけた耳元に響く、冷たい外氣が障子の隙間より白い針の様に洩れて来る。もう夜明近くだから人の足音が聞こえさうなものにそんな

ある幸福というものが誰にも知れない様に靜かにそして身邊に近づいて来る様に思うのです。あのどこまでも響く澄み切つた空をじつと凝視していると、そこにはまだ私達が見た事のない不思議な幸福という或一つの世界が存在している様に思ふのです。野に出て見ると銀色のすゝきの穂波が風にゆれ、秋の千草が可愛い私達の妹のようにこの世の中の片隅に／＼とましまやかに咲いて私達の目からひとりと離れる様にそつと地上に横たわつて散つて行く、なよ／＼と吹く風は葉末へにと秋の便を色々に告げています。幸福というものは一体何處に存在しているのでしょうか。幸福と云うものは自然界にある。きれいな織物の中に誰にも分らない様にそつと織り込まれているのです。襟元を吹く微風もなんとなく快い花の香がこもつて流れて来ます。あのやさしくも床しいも／＼色のコスモスの香です。朝露にぬれた葉を秋風にゆらがせている。やさしいも／＼いるのコスモス、幸福は又このコスモスの花びらから生れて来ます。秋を代表する花の美しさに比べて美しさはななくとも、風に吹かれる雑草の姿にこそいともしめやかな秋の風情でなく何でありましょう。

さつと遠くの高い山に太陽が昇つてきら／＼とすどい光を雪の上に向けらす。眩しいばかりの雪の世界は、美しく靜かにどつきりと枝がゆれると、雪は火花の様に散つて落ちる。思ひ出した様に飛んで来た雀が、驚線に止つて雪を振り落した。又落ちる白いものにびつくりして「ちつ／＼」と雀は飛んで行った。

人々は平らに降り積つた雪の上に大きい足あとをどき／＼とつけて行く、其の上を馬車が荷物をつけて通る。さうして、うちの人に交うところは、すべて黒くよごされていく、でもはるかに續く原野にはいつまでも廣い白い雪がしづかに青空の下にかざやいていく。



スポーツ

土岐 榮

我々のスポーツは
虚偽もなく、蠻勇もない
輕薄もなく、利己主義もない
純粹の心と心とが接觸し
正しい意氣と意氣が溶け合つて
眞實のものとして
終始を一貫する
だから
觀るものも^や行るものも
すべて俗界の邪想はなく
清く尊い本来の
燦たる姿と化して輝くのだ
スポーツマンの集いこそ
民俗のシンボルとして
人類平和の焦點となる
世界に人類の存する限り

涯しないであろうスポーツは
進化の法則に隨つて
今日の人間より明日の人間へと
新しい歴史を創造し乍ら
永遠不滅のものとして
益々發展するであろう。

冬

高一 高橋シヅ子

朝も晝も夕も又夜更に
鋭い寒さがあたりを
かきむしつて
苛責なくつき進む
冬はだまつて
ひし／＼とおしつけて行く。

不安と絶望

高二 岩本スミ

いらだたしい絶望が
壁の奥で燃えている
日々はものうげに去るだろう
木の梢は
エナメルドのように明るい。

想いつめた眼ざしは 廻る
どろ沼の渦に
吸い込まれそうな魅惑
短い手紙を
讀んでは せつなげに捨てる。
なにかも不安の霧の中へ
押しやつて
愚かしく また
渦の中の幾條もの 小さな波紋を
次から……
次へ。

一筋の直線！
無数の交錯。

現われる光、光の塊り

眞實！
凝視！

豪雨

高一 小林トミ子

降りしきる雨

鳴り響く音
この空虚さ！

またも来る 泥濘の暗黒の沼
墜ちる 極みない地軸のはてに
虚無よ！

見よ

無際限の宇宙を横ぎる

雲 雀

中三 大森イト

はれやかな病知らぬ荒野の鳥 雲雀よ
朝早くから
空に叫ぶ お前の歡喜は
幸福の象徴のようだ。
お前が栖家には幸福が溢れる
いま、まつくろな雲にこだまするお前には
野趣が満ちる
そして野を越え山を越えて
みはるかす彼方に
流れて行く。

お前は眠る柔かな花の寢床には
やさしい月がほゝえむ
雲雀よ

私はお前のやうに荒野のなかでくらしたい
お前と一緒にすみたい。

翼も歌もないけれど

私は夢を大事に抱きながら。

冬

高一 荒井高子

オ、寒い
水にさわつたような
手足のつめたさ
子供達も
かたまつて日なたに
たぐんでいる
「なんて寒い冬だろう」と
小鳥達もぼろずの木々と
語り合っているだろう。

○

中三 阿部亘子

粉雪の降る淋しさよ

どこの花屋を尋ねても
花屋の店はからでした。
涙ぐみつゝたゞ一人
歩めば知らぬ裏街で
盲目の母を背負い行く。
たづねた花はなけれども
それにもまして美しさ
乙女心のかれんさよ。

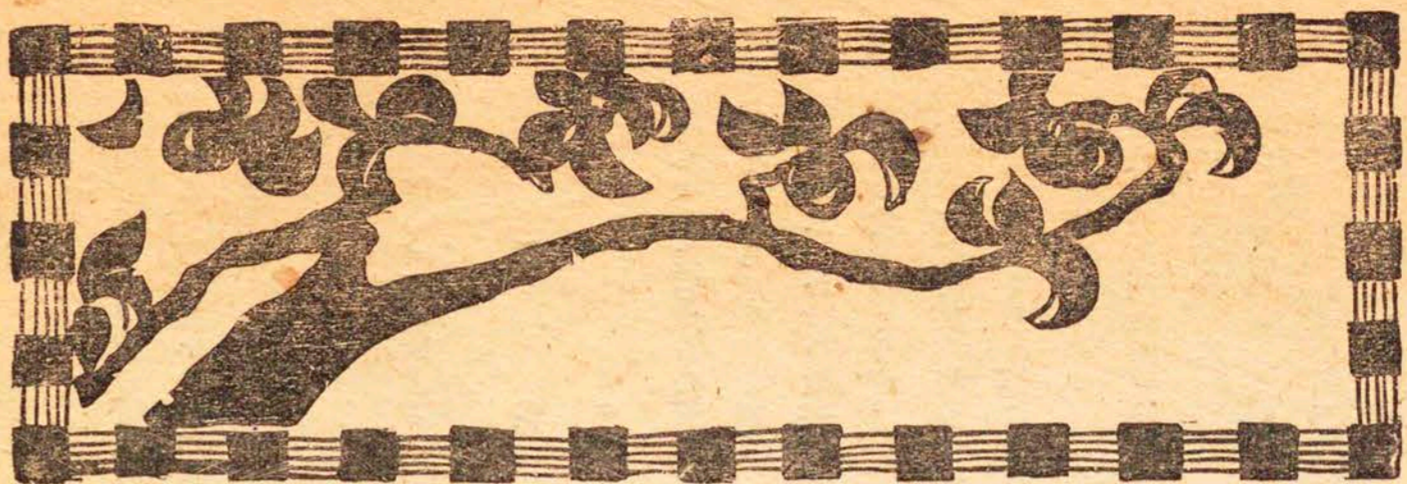
われは優しく微笑みて
家路にたどる道すがら
又ひとしきり
粉雪降りぬら／＼と。

花 薔 薇

我がうえに 死もあらなくに
などかくおつる 涙ぞも

ふみくだかれし 花薔薇
世はなれのみの一ろきよかな

無名子



春まだき

雪や来と心にかけてし雲去りて春もまだきに梅咲きにけり
 眼鏡越し書よむ姿日にまして目につく迄に老いたまう母
 はたとせに餘る昔の友どちと語るも嬉し今日の集いは
 浪荒き大海原に船出する吾子安かれともづなを解く
 よろこびに巢立つ教え子ながめつゝ永久に潔くと祈る今日かな
 山添えに汗ばみながらたすみぬ鬼怒の流れに遠くうね見ゆ
 北海の出船の音に眼を覺まし窓を明くればかもめとびかろ
 しのばずの池を渡りてくる鐘は多くの人に五時を知らせん
 うらゝかにかげらうもえてしづがやに童つどひてまりつきつゝ
 高き熱やみにし友の添寝してうつろの言葉たゞ聞きにけり
 いつしかも老眼鏡を友とするぢゝとなりぬる何か佗びしき
 乙女らとベンチによりて書をよめば眼鏡の奥のあたゝまるかな
 われ老いぬしかはあれども老いもまた尊しというまこと慰む
 かゝる世に世をたのしみて我生くる大いなるもの我を護るか
 閑かなる冬の椽側背を丸く陽にあたりつゝ足の爪剪る
 答案を調べ終えたるよろこびに柿など食みて夜を更かすかな
 栃の木の花の匂いもなつかしき蜂蜜を賜ふ栗山の大人
 栗山の奥なる椎の木になれる椎茸なるぞ大人が家づと
 強しとは思はね我をしかすがに正しと思えどよそめにはいかゞ
 この家の主人ひぞこり氣の弱く生くるを蔑しねすみ騒ぐか
 ねすみ來ぬ禁歌をわれ詠みて封じ込むべく愚ごとと思ふ
 下手糞の歌が却つてねすみ來ぬ禁歌となるか古歌に劣らで
 おのれのみ獨り高しと思ひ居る何あやまれる我ならなくに

相馬清五郎

渡邊ユキエ

大根田圭子

倉松千代

北島貞男

萌えいづる小草

萌えいづる小草を踏むにたえがたく足どりゆるむ春の夕ぐれ
 夕暮れて枯れ木にかゝる三ヶ月が淋しくわれを照すなりけり
 春風に赤きリボンをなびかせつ花の散り來る窓に學びし
 さら〜と雨戸にかゝる雪の音淋しき増して夜ふけにけり
 元旦や掃き清めたる奥の間に光さしさう氣あらたなる
 白菜の鹽のきゝたる色よさに齒に沁みとおりしばしかみしむ
 冷え〜と手にとる綱も新らしく年の始めの若水を汲む
 冬枯れて寂しき町のま夜中に遠く聞ゆる笛の音あわれ
 ふみしむる岩のもとより遙かなる雲の限りの筑波山見ゆ
 寝つゝ讀む本の重きにつかれたる手を休めては物を思えり
 あれこれとプランをたてゝ迎えたる冬の休みは何もせず過ぐ
 生花の梅のつぼみもほころびて平和の年ぞ明けそめにけり
 寒空に高くそびゆる煙突の黒き煙は限りなく出づ
 霜どけに自轉車かつぎ郵便屋なつかし友のたよりもてくる
 正月や近づきたりと指折りにて楽しく歌う幼な子供等
 きびしさに父を怖るゝ癖つきて心弱くも我は育ちし
 桃割にはじめて結いし嬉しさに帯をむすぶと姿見に立つ
 たゞ今と歸るわが聲聞きつけてオーバに飛びつく小犬かなしも
 しん〜と更け行く夜の静けさに時計の音は絶えず聞こゆる
 ものみな枯れて散り行く庭の面に清くひらけり寒ばらの花

高田村君代

中三柏崎たい

高二飯塚トシ

中三大森イト

高二高橋久代

高二福田知子

高二高松チエ

高一日向信子

高二橋本二三子

高二永岡芳江

高二鈴木峯子

高二落合キン子

中一竹下紀美子

中一鈴木ミチ子

中三大島セツ

高二直井マサ

中三飯野キヨ子

高二黒崎節子

高一松井和子

高一桑原治江

家政ノ一ト

高一大森 敏子

家庭經濟に付いて

終戦後社會經濟は邪道におち入り、我等の生活は苦難となつて参りました。現在の社會を見るに、文化國家として、再建途上にある日本が、インフレの上進に伴ない私達の生活は苦痛重なるばかりの耐乏生活を營みつゝ居るが故に一家の經濟については生活の安定を考へなければなりません。それは常に同一標準に生活程度を維持し、多少の餘裕を持つ事で、常に収入を多く支出を少なくする事が必要であります。一、家こぞつて働き少しくても多く収入を得、毎日の生活の必要以外に貯蓄は永続性の物にして置き出得るだけ支出を少なくする事が望ましいが、現在の社會ではそれが困難であります。

今政府は經濟安定方策を叫んでいるのも物質の生産少なく、せまき國土に戦後の海外引揚者に依り人々の増加と共に食糧不足等で、私等理想とする生活的經濟は苦しく私達の村の現況を見るに、大部分農家で生産された食糧が丸公で供出し、購入する生産資材は開である爲めに供出分は生産資材費になり、生産費は保有分を節約して超過供出して産みだすが、丸公で供出した以上の税金に依り一生懸命に働いても殆んどが税の爲めに取られ、眞面目な正直者は生活出来ない現狀であります。

家庭經濟に就て

高一 市島トシ子

故に經濟安定せざる限り一家の經濟は不可能であります。かくの如き社會に於ては家庭の狀況により、一家をろつて能率的に働きそして、収入の道を多くする事が必要であります。正義が不慮の災害があつても副業にて生計が立つようにならざる様に分け置き、支出については収入に應じて豫算を立て収入支出を明かに記し、後の参考にすべきであります。私の家では父が農に勤み、兄はサラリーマンとして働いて居る爲めに月収入と支出の豫算を立て家計簿を活用して居ります。要するに家庭の經濟は家庭の生産性を充分に發揮し、消費を合理化し節約に努めて家計收支の均衡を維持し生活の安定を期す事であり、家族皆努力、家族全員それ／＼その分に應じ働き、自動的に國策に協力し、物の増産に勵み、収入に於ては出来る限り節約して貯蓄し、現在のインフレーションを防止し、生活の安定を計り、新日本再建の爲めに努力する事により家庭の經濟は良くなるのであります。

現在の我が國經濟の貧困は、實に開關以來最初にして最大のものであります。それは戦争によつて空費された物資の欠乏に伴つて發生したインフレーションの昂進に因るものであり、現下我國の經濟操作の良否は實に全國民の生死にも關係する重大事で

あります。そして一國の經濟が一國民の又一家庭の經濟の集りであるとするならば、此の表題の經濟が如何に重要なものであるかと言ふ事がわかるのであります。又此の家庭經濟を更に分析して其の成り立ちを考へて見れば、結局一家の主婦の經濟觀念の有無が最大要素であると言ふ事が出来、一國の大蔵大臣に匹敵する一家の主婦は先づ其の經濟活動の源泉となる收支のバランスを計る事に周到な注意を拂ふ必要があります。すべては過去の經驗から割り出した豫算に従つて行はれるものであり、又これらは將來に對する計畫を含むのであり、心ずし、金錢の出入ばかりを問題とするものであつてはなりません。例へば主婦や家族の者の消費する時間を有効に活用する事なども又輕視する事は出来ません。順序を誤つた仕事の能率は實に想像以上の不經濟を招き、必要以上の努力を無駄に空

法隆寺の壁畫炎上す

北島 貞男

金堂の壁畫うしなひ日輪も裏に居るとしあはれ言へこそ
凶つ火のほのろを浴みてみ佛はいまはの際も愛し笑まえる
大いなる國の實を燒きたるは何人の罪何者の咎
觀世音心に念じ眼を閉ぢぬ夢のうつゝに現れたまうかと
あるときは靜かにみ名を唱えつゝわが身ひとつの幸いのあわれ
たまさかの誦經のこゑも澄み渡るわが小庵の朝冷えのして

國映畫に及ばない日本のそれが悲しくなる種だ。
此の映畫は時間ながいが見えずに見られるさすがに文藝的作だけである。

映畫

毒藥と老嬢を觀て

高二 赤羽陽子

アメリカ映畫に於ても最初の試みであるといわれるこのスリラー・コメディー映畫は、空間のない鏡の線を描き横にはりめぐらして、ふれる度毎に面白い印象を與えてくれる。狂人一家の中に、一人の普通人間(ケイリー・グランド)を取り入れ、それに警官、運轉手ケイリーの恋人等、面白おかしく盛込んで觀ていく私達には、たらく味あせてくれる。狂人であるケイリーの伯母アビーとマザーが、獨り老人を毒殺して行く會話を聞いていると、餘りにならぬかに、しゃ／＼しているのだから、隣家の牧師の娘(エレント)の結婚を知らせて飛び込んで来るケイリーが、老人の死体を發見して大いに驚愕し、平然としている伯母達に問ひ直して居る方が觀ている私達にはよっぽどキ印に見えてくる。これ等に喜劇としての面白さがあると思う。今度はケイリーの兄に當るお尋ね者の殺人狂が何年ぶりかで退手の目を逃れて歸つて来る。こゝで又お尋ねしさを持つて逆効果を得た。更に驚嘆させられたのは、殺人狂の顔面のメイキアップである。無氣味な針目、おそろしい目、唯々、イヤ／＼の巧妙さに感心させられる。又、山のように巨大な殺人狂に對して、何時もおど／＼している先生と呼ばれる小男を對照させているのも面白い。場面として印象に残つたものは、キ印の伯母達の爲に死んだ老人を、同じキ印で自分がシオドア、ルナマ運河と稱する地下室へ運び出す光景である。眞時間の中から突然バ！と地下室の扉が

開き、出て来たアビーが老人を背にして地下室へ下りて行くのを、下から強い光によつて黒點をはつきり浮き出される場面等、強く印象に残るものだ。常に明瞭な球と球という特徴をもつアメリカ映畫は、怪奇性をも併せ有していることはこの映畫に於てその片鱗を見ることが出来る。例へば殺人狂が逮捕された時、その共犯者である小心者の先生を逮捕せずには逃してやる場面やラストに戀人のエレントが常とは相違したケイリーに不審を抱きながら地下室へ入つて行く、死体があるのに驚いて警官に告げようとするのを、ケイリーがキスで口止してしまふ場面等がこれによく現している。とにかくこの「毒藥と老嬢」は如何にもアメリカ映畫らしいものである。

ヘンリー五世を語る

高一 中山敦子

1. 場面が天然色のため非常に綺麗であり、シネマスピア原作として文藝的價値の高い作品。特に丁度讀んだあととしての映畫と原作との度がはつきりして時の英雄ヘンリー五世なるもの、生活狀態を何事が出来たか、特に我が國の現在の狀勢から見てもヘンリー五世が部下と共に時のフランス遠征に就いて、此の遠征が正しいかどうか語りながら、勵ます所など今迄の日本の過去に於いても欲しかった所だと思われた。常に部下と共に他國に住むに於て眞にドラマチックな場面を感じる。我々日常生活においてもかのヘンリー五世がたつた行動は私達女學生に上級生と下級生との友情をなす一層緊密にしなければならぬと言ふことを教えて呉れた。扮装はフランスの時代の風俗を何う事が出来る。トリックにしても外

費する事になります。又小さなお勝手の料理の作り方を考へて見ましても、材料を貯蔵する方法、使用の順序等を観るならば必要以上の燃料を空に燃やし、又無駄に材料を腐らせて、いたづらに、ゴミ箱に肥やす結果となるでせう。又収入額を無視した必要以上の材料の仕入れは、收支のバランスを失つて是非共入用な支出費用の支拂ひが困難を來たす事もあるでしょう。これを避ける爲には、前記の計畫的豫算の忠實な實行より外に無いのであります。そして此事は日常交際に必要な費用、衣類に對する経費、住宅に關する修繕の費用、其の他あらゆる諸経費に付ても同じ様な事が言ひ得ると思ひます。
要するに家庭經濟の成否は、主婦の生活設計の健全な確立にあるのだと私は信じて居ります。

高一 猪瀬和子

英國の生んだ偉大な劇作家シネマスピアの代表作の一つ「ヘンリー五世」が映畫化されたもの。最近英米の映畫界が復古主義になつている様子が此の映畫で、ジャンヌ・ダルク「ロマチ」とジュリエット等でもうかがわれる。とまれ美しい景色のないシネマスピアと好演息詰る程々前に展開して呉れた。早大の講堂はグロリア座を模したものだぞうだが、その有名な地球座を初めて見再び感心するものがあつた。シネマスピアの爲かスティーブが少くとも門外者には三時間ばかりと退屈であつたかも知れぬが、シネマスピア研究と云ふ意味でも興味がある。マダナカラムが制定されたのが十二世紀で、民主的英國が早くから生長した十六世紀の英國國民氣質が内閣と觀客を通じて着取出来る劇はあのわけの分らぬ百年戦争の中頃英國が武威を輝けていた頃で、當地の英國國民の胸には其の想が一杯であつた事である。シネマスピアは此の想と例の道化役とで一般人をも決して飽ませる事なく自分の藝術境に巧く引張つて行つて居る。十四世紀ロンドンの町ドビー海映美しいフランスの平原はそれ丈でも一つの畫である。敗北のアイル兵を使つての戦争は實感に良く出している。しかし原作に餘りに忠實で映畫化としては成功とは云えぬだらうし、又シネカライの困難さを懸命に克服せんと努力してはいるが、まだその完成は將來の事だと思われ。俳優装置等に今迄にない高度の技術を要するシネカライが日本でも早く實際化される事を望んでおく。

鑑賞





松島修學旅行の記

芭蕉の奥の細道にひかれて

行つて参ります、行つて参ります。

さようなら、さようなら、お元気でねえ、

先生方のおやさしい聲も灯もステーションと共にずる／＼と後ずさりして一瞬の中に過ぎてしまつた。

校長先生初め諸先生方のお送りを感謝しつゝ、宇都宮驛をあとにして松島への旅行に立つたのであつた。別れの昂奮から覚めてホツとして車内を見廻すと、グループに分れて話しあつてゐる人、しつとり夜のたばりのお切り切つた窓外を眺める人、こゝはさながらおしゃべりの小世界のよう。

白河あたりから眠気がさしてどうする事も出来ず窓邊に伏せた。気がついて見ると北山、新井兩先生ともすつかり眠つていらる様子、でも私達がいくら眠つても絶え間ない車の音と気笛に神羅まで休まらない、先生も矢張りそらなのか知らぬ。郡山、福島、大河原、槻の木あたりから夜が明け、岩沼あたりから本格的に明けはなれて朝霧に霞んで遠く木々が散在し、彼方の山々をしつとりと包んでゐる。その時々しいまでの美しさに私達はたい、驚異の眼を見張るばかり。

列車は無事仙台へと到着した。すつかり明け離れた忘れな草の花びらの様な空、プラツトホームに待つてゐる人達は物珍らしそうに私達を眺める。種釜行きの電車に乗り換え車中で朝食をすました。昨夜の眠不足と長旅のため大分疲れてゐるが皆元氣よく種釜の旅館に着く。不必要な荷物を旅館に置いて、種釜神社へと向ふ。化粧品やマーケツトや八百屋、雜貨、映畫館、種々の店がずらりと並び、宇都宮の町と異つた古風で静かな町々を縫つて二〇分歩くと、急な高い石段にさしかかると、杉の老樹が茂りくずれかけた燈籠、苔むした石の鳥居。昔からの香りがしみ込んでゐる様な厚めの木には「奥陸園一宮」と書きほりしてある。この表参道で寫眞をとり、石段をよち／＼登つて境内に入る。朱色の眼のさめる様な圓い柱、檜皮葺の屋根、朱、緑、黒、白が美しく調和し金色の金具の放つ光りによつて、莊嚴の中にも美しさが感じられる。右手には文治元年和泉三郎忠衡の奉納したという燈籠、多羅葉の老木が一面の眼をひく。北島先生のお話では我が國の古い燈籠の一つで有名なのださうである。

いよ／＼松島湾内舟行——カモメが二三羽飛びつゝ船は今入江を後に進む、静かだつた波もや／＼荒くなり、それと共に私達の船が上下にゆれるその度事に、歡聲とも歡喜ともつかぬ聲が上がる。海の色は藍色に、波と波は戯れあつては、高くなり低くなり、船は今刻々と速度を増し、小さく眺められた島々も眼前へと近づ

ぬうまきであつた。私達は少し休み又元氣に登つた。凸凹で歩るきづら道で「フウ／＼」と息をもらしながら一生懸命に登つた。そして山越え川越えようやく噴火口の所までだどりつた。そこから硫黄の吹き出るのを眺め、少し休んでからお花畑の方へ廻り途中で寫眞をとり下山した。今迄登つて来た山々には、深く霧がかまつて遠くが見えなくなり、一人で走つてしまふのであつた。私達はしつかりとした氣持で下りた。そしてようやく霧の中からぬけ出た。だがにわかにはいぢわるな黒雲が出て来て、空をおぼつてしまひ、急に雨が降りだした。私達はお／＼さわぎを

「間もなく松屋旅館前で御座居ます、どなた様も忘れ物のない様に願います」バスガールの聲に今まで静まり返つてゐた車内が急にざわめき立つた。そしてリュックや手提等をまとめてゐるうちにバスは停車、私達は好奇心にかられつゝ我れ先にお知り山に登れる様身輕な支度をして出發した。登れど／＼山ばかりである。山といつてもそんなに多くさん木が生えてなく、禿山の様にボツ／＼と木が生えてゐるだけである。だが遠くから見ると、青々としてとても美しい。私達はつかれを忘れ元氣に登りようやく山の中腹にある山小屋についた。その時は足が棒の様になり、たゞ呆然としていたが「こゝでへたばつては大變、まだ／＼これからである」と誰れしも心に誓ひ

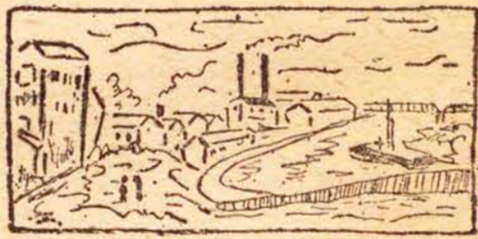
雨の那須登山記

(猪野園子記)

「間もなく松屋旅館前で御座居ます、どなた様も忘れ物のない様に願います」バスガールの聲に今まで静まり返つてゐた車内が急にざわめき立つた。そしてリュックや手提等をまとめてゐるうちにバスは停車、私達は好奇心にかられつゝ我れ先にお知り山に登れる様身輕な支度をして出發した。登れど／＼山ばかりである。山といつてもそんなに多くさん木が生えてなく、禿山の様にボツ／＼と木が生えてゐるだけである。だが遠くから見ると、青々としてとても美しい。私達はつかれを忘れ元氣に登りようやく山の中腹にある山小屋についた。その時は足が棒の様になり、たゞ呆然としていたが「こゝでへたばつては大變、まだ／＼これからである」と誰れしも心に誓ひ

き、風雨に吹かれた雄々しき緑の松、そこに天然の美が無言の中に見出されるのではなからうか。この天然の美しさを何と形容し何と書き表はしたら良いか、私の此の拙い筆では到底表現する事の出来ない悲しいらたどしさをどうする事も出来ない。遙かの島は波の寄せては返すたびに小さな飛沫を上げて、壯麗そのもの、材木島が姿を現す。先の舟には北島先生、齋藤先生、北山先生が乗られ、あとの私達の船には新井先生が乗られた。齋藤先生の微笑んでいられるのが見え先生の眼鏡が時々パツと光つては消えた。流れ藻が帯のように海にたゞよつてゐるのを船べりの人達は一生懸命に天草や、昆布のようなもの、ほんだわら等緑褐色の海藻が取り上げられ、あちからこちから歡聲がしきりに湧く。

名残り惜しい氣持で舟に別れをつげ瑞巖寺へと向ふ。強い六月の日ざしに大分汗はむ、境内に進入しと鬱蒼とした杉並木、涼しい樹かげでたのしい朝食をすませ、案内のおじさんに導かれて伊達正宗の菩提寺という瑞巖寺に入る。桃山時代の建築物で先づ棟に描かれた狩野元信の繪が眼につく。恐しい程高い天井、大きな板で作つた床は溢い光りを放つて、塵一つ無い、莊嚴そのもの、寺、何時か私達は浮世から遠く引き離された百五十名の生徒が入つたとはどうして思われぬくらい静かで、墨染の衣を纏つた二六、七の若いお坊さんの説明が朗々とあたりの静けさを破つてひびく。左甚五郎の彫刻、白菊の間、松月の間、襖の繪に依



復興第一回バザーのスナッフ

全校職員生徒の協力になる復興第一回バザーはいつも盛大に三日間に亘つて開催された。初日は生憎の雨で、張切つて待機していた私達には何かの足りなかつたが、それでも二日目の日曜日は秋晴のバザー日和、我等のバザーを終日暖かい光で愛撫してくれた。美しく飾りつけられた各部室から輕快なメロデーが絶えず流れ、それに合せて係員のはずんだサー／＼の聲、押し寄せた入場者の聲が一つになつてわれんばかりの盛況ぶり。階上に設けられた喫茶店は眞に大入満員、補助椅子を出すやら品不足を訴えるやら大騒ぎ、三日間の入場者總數は五六〇〇名に上り各部室の賣上金も三〇万円に上り、豫期以上の好成績を以つて終る事が出来た。

つてそれ／＼部屋の名があり、正宗が毎朝坐禪をして精神修養に努めたという部屋、明治天皇御幸の際の御座所、畫なほ薄暗い三疊程の部屋は日本獨特の遊びをもつ。一通り説明をうか／＼廊下からふと見ると紅や紫の愛らしい花が私達の眼を休ませてくれ再び現れ引き戻される。正宗が朝鮮征伐の時鉢植えにして来たという門の左右の白梅と紅梅は、樹齡六百年とか、龍のよう枝を張つてゐるので伏龍とも云うとの事であつた。

私達はそれから國寶五太堂を見て雄島に向ふ、長い／＼橋を渡つて行くに恰度退潮時で小魚が群れをなして遊んでゐた。然しこの邊では私達は疲れてもう一歩もようやくであつた。公園である、こゝで十分休んで光明亭へと急ぐ。こゝは伊達正宗が月明の夜、歌の會をもよおしたという。こゝから海を眺めると帆船が浮いて島々が良く解けあつて美しきは一入であつた。北島先生、齋藤先生は「此處で月見の歌の會とは素晴らしいなあ……」と感歎していらつた。それから電車で種釜へと戻つた。その晩は服装の手入れ、髪の手入れ等をして食事をした。寫眞屋さんはいそがしそうにカメラを持ち歩いてマゲネシウムを使つてうつつた。「私あまり光つたので魂消げて眼をつぶつてしまつたわ」「大丈夫よ光つた時にはもううつつゝゝゝ」などと話しあつてゐる聲、それから齋藤先生を無理に引きとめて歌をうたつてもらい、管理部のおじさんのボンボ踊りには誰も笑はない

學課室

達が楽しそうに明るく見えてうらやましい程よ」とおつしやる。

美しいメロデーの流れる此の部室、色とり／＼に飾られた生徒のお習字や繪畫が部室一杯に展覧され來客の目を驚ろかした。此の有様……メモ帳を覗くと

黒い標準服着にモンペ、新しいばん傘を片手にたかばを持つた中年の婦人、かみ手の書展をしみ／＼と見いつていたが連れの人が

A 「自分の子供がこうして飾られると見るにも眼合があるけれど……ね。家の子なんか未だ中一で此れ迄になるにはいつの事だか」

B 「やつぱり上級生にならなくちゃだめだね……」

そこに先生が見えられたので長々と挨拶の後。

先生 「此の雨に遠い所からわざ／＼大變でしたね」

A 「え、でも百姓家は雨の日でもなくちゃ出て来られませんか。今は稲こきで忙しくて猫の手もかりたい取入れ時でね」

次々に來校のお母様やお姉様も熱心に御覽になり種々多様なお顔、我が子の秀逸な作品に微笑むお母様、此々の書道は豪華だと感心したり驚いたり、連日見にくると言ふ熱心家。

(川中子美代子記)

手藝室

復員軍人らしい人がつか／＼とテーブルセンターの前に来て
「ホーこれは又美しいですな、綺麗ですな」と言いながら一枚手に取って
「此れ一枚下さい」
「はい有難うございます」
するとズボンのポケットにそれを無造作につま込んで、行ってしまった。
「随分氣前の良い人だわ」生徒の一人が
「金持さんは違ふわね」
すると今度は高生が五六人、中にはきちんとした人も居るが、煮しめた様な手拭を腰にぶら下げて居る人もある。頭をてつかりとオールバックにした学生さん
「ちよつと此れは何ですか」
「はいテーブルセンターです」
「此れは何で言う刺繍ですか」
「フランス刺繍です」
「日本刺繍とは別なんですか」
「はい別です」
「するとこれはどんな場所に使用するんですか」
「はあ、洋間にでもお使いになると素敵です」
「これは學校で仕入れたものを生徒が刺したんですか」
「そうです」

「どの位で仕入れましたか」此の學生は何んていやな事迄質問するんでしよう、一寸にく／＼なつたけど
「ホ……お詳しいんですのね、お買いになつて下さいな」
「いや僕達は金がないんで参考の爲に見學に来たのです。如何に須賀高の皆さんが上手である事が此れ一ツ見ても良くなります」
「はい、おっしゃべりをして行く。
さんざんおしゃべりをして行く。
次は作新學院の生徒さん
「まあ二十五圓だつて案外安いわね」と言つて素通りしてしまふ。二百五十圓を讀み違つたのだらう。間違ひも甚しい。

喫茶室

此處二階の喫茶室いつも満員の程、お祖母様、お祖父様、お母様、お孫さん、大學生、高校生等此の部室だけは大威張り、甘い／＼お汁粉に、生菓みに舌づ／＼みを打つて一休み……どころか三日とも此處だけは續けて来ると云ふ熱心さ……流石に期待していただけあつてお客様もおすすすなで物凄く有様です。清い美しいメロデーも此處では甘いメロデーと變る。
和洋裁室
洋裁室
三日目の午前十時頃、孫の手を引いて何かさ／＼やきながら入つて来た田舎風のお婆さん、今日の最初の客である。
お婆さん「此のエプロンは生徒さんの作つたものですか」
生徒「そうですよ、私達が放課後日の没るまでミシンをかけた刺繍をしたり、その上純綿、それこそ丈夫ですよ」
お婆さん「そうですか、そんなに丈夫なら一枚……」
生徒「はい有難度御座います。隣の室にはわたしの作つた素晴らしい洋服がありましてからどうぞ御覧になつて下さい、お婆さん」
こんな風で三越の賣子も顔まげ、おかげでエプロン、ソックス、ブルコース、飛ぶ様にられる。
和裁室
まさに本校の傳統だけあつて、どれもこれも皆人目を引くものばかりである。
こゝにも珍らしい風景。
高く低く飾られた着物に注視して居る口の悪そうな男學生
A曰く「ふん女だけあつて着物はすごいよけれどちつとも進歩性がないぢやないか少し研究すりやいな」
B曰く「そうなあ。君この子供のからいう着物は見たことないぜ、これなんか少しは研究した現われじやないかな」
A曰く「うん、そうかなあ」
C曰く「うん、これか、布が少しで出来るからか、經濟觀念には富んで居るよ、現在の日本にふさはしいぢやないか……」

この様な批評を耳にした。
少し口惜しかつた。しかし少し考えさせられた。今後は大いに研究しよう……。
その矢先、下駄を手にした他校の女學生四、五名、もう歸るらしいので「何か御感想御座いますか」と尋ねた。まさか女性である、口がうまい。
A子さん「非常に良く出来ましたわ、特に手藝品、あの鏡掛け、ロザシ、テーブルセンター、セイター」
B子さん「本場だけあつてすごいわ、あのハゴイタすばらしいぢやないの」
C子さん「そうね、絞りなんか上出来ですわ、けれどわたしは、下足番があつたら、なお更よかつたと思ひましたわ、ホホ……」

暮色蒼然學窓を包む、あゝ役終未だ、閉場だ、感慨無量。(關口久子記)

秋風の音をき／＼とあぜみちを静かに歩む心わびしも
野菊をば手折りに暮にさ／＼ぐれば母の面影浮ぶ夕暮
高二 黒崎 節子
さら／＼と雨戸た／＼きて雪のふる甘酒のみて夜をたのしめり
亡きものとおきうめて居る吾が子をば、今宵も思ひ母はうるみぬ

暖冬抄

相馬 清五郎

大根 田圭子

雪やんで天地は明けぬ雞の聲
停電に賑はう宵やかると會
乙女子の刺なる窓に梅かをる
悠々と空に鳶あり田圃道
若水や大氣一ぱい吸いにけり
向う岸は日の影あるに夕立す
コスモスや浮雲庭を流れけり
コスモスや運動會の庭に咲く
庭廣くわたちの跡や萩のつゆ
渡し待つ人の嘘やみぞれ降る
業卒へて巢立つて行くや春うらら
湯上りの肌は夜風の湯氣が立つ
もみぢ散る出て湯の宿の集いかな
花の魁入學の子は母とつれ
早春に教え子嫁けり吾れ老けて
豆まきや隣りの聲にさそはれて
初雪の便りなつかし麦の青
庭掃いて水仙の芽を圍いけり
いねの葉につゆひとしづくおりてくる
淺虫の湯に浸けりひるさな

倉松 千代

北山 シゲノ

渡邊 甲

雨模様日光線の音すみし
初日の出拜さす雨の音をきく
そば湯氣に包まれて行く大晦日
元旦や雨にぬれたる晴着哉
朝明けの光まばゆし玉の露
かな／＼やくれて淋しい西の空
追い羽根や隣の垣に落ちにけり
雪はる／＼障子のかげの小猫哉
老いし母も無心になりて羽根をつく
山茶花の散りにしあとの寒さかな
編棒の先きの冷えくる冬の夜
冬空にきらめく星座身にしみる
ドア開けし人外套の雪拂う
秋風になびく芒穂や赤とんぼ
水にゆれ風に光りて猫柳
麥青く供出誓う隣人
冬木立はるかに町に見える丘
ほし草に影おとしとぶとんぼかな
亡き父をしのぶ今宵や月の影
秋山にせ／＼らぐ谷の水清し
日は落ちてどんより静か秋の沼

高二 内藤美代子
中三 鈴木 玲子
高一 内田カヨ子
高二 猪野 園子
高二 萩原 ミツ
高一 坂本 住
高一 大出千代子
高二 蓼沼 サヨ
高二 佐藤 イツ
中三 落合トミ子
中三 小野 満子
高二 田村 君代
高二 阿部 フジ
高一 一条 富美
中一 福田 映子
中一 佐々木 瑞子
高二 雪 節子
中二 小林 玲子
中二 条川 ミイ

English

There are 2 aims for us to learn English. One of them is to learn the western cultures and civilization through it, and the other is to make foreign people understand Japan more and more. Now, we must think that we are not only Japanese, but also the freemen of the world. and so we had better to know some foreign languages as well as our mother tongue.

I have ever heard about the Esperanto as world-words, but I wonder why it is not so widely known, however I must have some weak points in it. By the way, no one has no ability to learn English, If we were born in England or America and we don't know any Japanese at all, I'm sure that we must be able to understand English better. If you want to master English, you must begin to speak and think in English as we did the Japanese tongue when baby or child, because it is a quite natural way to learn any language.

It is true that there are many ways for English learning, speaking, and thinking in English. Therefor, to speak and think in English always are the best way of bringing a good result, because you shall be able to learn speaking, reading and translating at the same time. Now I'll told that there are some difference between the English spoken in England and America. The nation has a peculiar history, tradition, location and the language.

Since the world 2nd war was over, what we call American English has been popular and useful in Japan. But we must know that the English spoken by British people is as important as the English spoken by American people.

Who will say that the girl students of High School need not learn English nor can understand it, only because it is too difficult for us to learn?

Study English with ambitious hope and strong hearts!

Now English is called a window of the world through which we can see everything instructive for our life.

The End
Member of English speaking club
Toki, Fukuda

Student and Reading

Student! Dont you think that reading is very important? I think that reading is one of the most important thing in our life.

Nowadays there are many students who have books, but there are very few who make the best use of them.

It is not necessarily to read much. We should choose a few good books to read carefully.

Student! Read what you think a good book slowly and again and again. This, I think, a steady and sound way of Reading.

It is a bad habit to buy more books than we can read. And unless we read than carefully, many books are not only useless, but sometimes they are even harmful.

A student, who say that he is so busy that he can not find time for reading, probably will not read when he has spare time, while a student who is (very) fond of reading, even though he may be leading a busy life, will manage to find time that is to be devoted to reading.

I think nothing in the world can benefit us so much as a good book does.

The advice of a good friend or a guidance of a good teacher can not always be had, when it is required.

A good books, however are always with us instructing us, comforting us, and amusing us.

The end
Member English of Speaking Club
Jinko Yashiro.



スポーツと文化活動

(校友会各部報告)

ソフト部

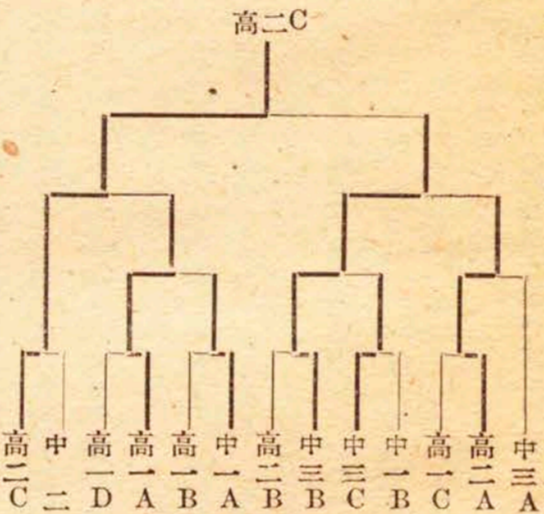
校内の皆さん行きまよ、バックホーム、お、ナイスボール……..
きつとあの日は天候にめぐまれた秋の良い日でしたわ、生徒主催の大会は本校では始めてなので、私達は不安でした。だがいや物はためし、やつて見なくては話にならない、出来るだけの力をつくしてやつて見ようと思ったのでした。校内の皆さんが喜んで参加下さったので愉快しかも正々堂々と、お互いに研究しながら、立派に無事閉会出来ましたので、私達は満足でした最後に毎年此の様な會の續けられる事をお祈りしつゝ筆を止させていただきます。

(御子貝トヨ)

記録帳の中より

第一回校内ソフト大会

期日 昭和二十三年九月十五日(水)午後二時半より
場所 本校々庭にて開始す。
組合せ成績次の通り。
一等 高二C
二等 中三B



庭球部

庭球が復活してから三ヶ年の月日が流れ、傳統のない私達は、牧野、大田兩先生の鼻さしめが熱心なる御指導を仰ぎ、上達した事は申す迄も無いが、それと共に心の統一と云うものが如何に人間として価値づけられたことでしょうか。私達は兩先生に對して厚い感謝の念で一杯です。また大田先生の後任としてお見えになつた小林先生が秀れた技術の持主であられ、前途に明るい希望を持つことが出来ました。

おかげで十一月十四日の足利で催された私立懇親大会に於て、一等の光榮ある賞状を頂く事が出来、私達部員にとつては偉んと大きな喜びでありました。これも偏らに諸先生方の御努力御指導の賜と感謝に堪えません。
私達に續く下級生の練習振りも前途に光

を投げかけてくれます。特に中學三年生等は、團結心強く堂々たる意氣に燃えて張つています。来るべきシーズンこそ大いに頑張つて我が庭球部の發展を期して頂きたいと思ひます。(木下)

排球部

スポーツの盛んな今日、私達バレー部は先生方初めコーチの指導に依つて、大空の下に熱心な猛練習を續けた。人々が眞剣に身体を鍛練すると時にスポーツマンシップを常に重じ、眞夏の太陽が遠慮なしにじり／＼と照りつける眞只中で汗とほこりによぐれ汗も拭はず、焼きたつ様なコートで研究を重ねた。而し努力と團結がたらずに、私達部員は技術として他校に劣らないつもりでも、精神的に敗けていたのであると出場選手

- 高二 大森 光子 山崎シゲ子
 - 武井 幸子 市村トミ子
 - 飯塚 トシ 高山 君子
 - 高一 福富 サク 吉澤 和子
 - 高橋 友子
 - 中三 相澤 トヨ 安達 千恵
- 後輩諸生の皆様、精神の鍛練、又スポーツマンシップをより良く作り上げ團結し、

籠球部

私達は最善をつくして毎日のように練習を續けて来たつもりです。けれどいろいろの事多くて思うようには練習出来なかつた。しかし私達五、六人の選手だけが毎日のように出ていても籠球部に入つていながら、一度も出て来ない人も少なくありません。籠球部としてたい名前だけ入れておく様な人はどうかと思ひます。今までの下級生で私達と練習したのは二、三人です。私達これからは思はれます二年生以上の籠球部員が進んで練習する事を私達上級生は望んでいます。とくに高等學校一年生の籠球部員は進んで下級生を出し、籠球部が消えぬようにして、ます／＼盛んになるように願つていきます。(籠球部選手)

八月十一日より練習が始まつた。
ヒビ……と笛の音を合圖に自分のコートにとかけた。しつとりと夜つゆにぬれた砂の上と赤い鉢巻、白い運動服、長い足をむきだしにして元氣いっぱいだった。朝はすゞしく氣持がよかつたが、一時間二時間とたつうちにちり／＼と照りつける太陽がにくらしかつた。ゲームが始まると白いわくの中で競争でも始まつたように砂塵の中に十人が見えな

くたつてしまつた。からだ全体にかく汗は運動服をぬらしハンカチをびつしよりにした。あまりにひどいほこりなので庭の池より水をこぼりの中の水をうつた。しかしかん／＼と照りつける日光にはすぐにかわかされてしまつた。晝すぎは足が「ガクリ／＼」となつて、からだ全体がだるく笛の音が聞こえても、ように腰がたふない、一日／＼の練習が終るとホットした。八月十七日に練習は終つた。顔から足から手、日にやけて昏んな元氣そうになつて歸つた。

○中都地区大會

ビーと笛の音を合圖に試合開始し。私達始めての試合、誰も心の中で勝つ事を祈つていた。眞白な運動服に大きく書かれた番號、相手はがっちりとした人ばかり、それに應援は黒山の様な人、悲しくも私達の應援は誰もいなかった。相手のシュートは必ず入つた。はいると頭のおれる様な叫び聲だつた。私達の悲しい試合は終つた。始めてだ。何んでも始めからよいものはない。これからだ、と皆んなで誓い第一高女の門を出た。

○縣下大會

びか／＼に油をつけたボールを二つ肩にかけて試合場の門を入つた。今日はお負けるのはわかっている。しかし元氣よく行つた。相手は第一高女。一生懸命に戦つた、皆んな汗だくだつた

いくら戦つてもやつぱりだめでした。この試合には御子貝さんが應援に来てくれた。負けただけでも橋本さんは元氣よく笑つていた。それに引かれて皆んなも笑つた。(後に残られる籠球部の方へ)
「今年こそ」「今年こそ」と云つていながら一度も勝つ事が出来ず申しわけ御座居ません。私達の出来なかつた事を貴女達ですて、よりよい籠球部にして下さい。間もなく又、練習する時が來ます。(宮尾政子)

運動日誌の最後のページ

天高く馬肥える秋、スポーツの秋、何もかも忘れて愉快に、そして張切つて……だが今は其秋は水の様に過ぎ去つてしまつた胸に抱く運動精神、運動力、此等を使うがまゝに發揮する事が出来なかつた其の心、泣けども泣けず……他の人々に運動精神が解るであらうか、いや一人残らず解つてほしい。
私達は後つづかて學校を巣立つて行く、各役員よ來るべきスポーツは皆さんの腕にある、みなさん！ お願いです。此れから運動精神を磨き、運動力も十分に、やがておとづれる時期にこそは火蓋を切つて一目標、本校の運動精神、運動力を發揮して下さい。 (昭和二十三年十一月十五日)

ダンス部

美しい明るい音楽に乗つて小鳥の様に舞ひ廻し事、つらい事も忘れ私達を樂しませるもの、ダンスである。私達はリズムの訓練によつて美術情操教育を得る事が出来る。去る二十三年八月十四日縣下体育ダンスコンクールが市内教育會館に於て行われ本校ダンス部員もこれに参加した。毎日暑い中を先生始め部員の猛練習によつて無事に終る事が出来た。充分造いかねが第一回の出場として良く出来た。同九月十二日には縣下体育ダンス豫選大會が宇工高に於て行われ本校も参加した。

団体行動はすべて各自が一体となつて行ふ事が一番の必要だと思ふ。今後私達ダンス部員は他校に取けず自發的に研究して行こうと思ふ。

- 部長 高田 本 セツ、余川 秀子
水田 美智子、中村 カツ
關口 久子、中島壽美枝
横島 サツ
B部 節子、福富 考子
C部 阿部 フヂ
副部長 柴田順子
渡邊知子

文藝部演劇班

可憐な梅の花を窓下に見て、本校文藝部と演劇班を振り返つて見る。粉刺、虚脱の灰塵の中より立上つた文藝部員を先驅者と

して、その後を受繼して着々と校内の文藝思想、そして批判力を養う爲に新しく結成された圖書部が、校内の知識をひろめて参りました。又、湖畔の一隅より湧き出する清水の如く、文藝部の中より眞の演劇を理解する爲に、又愛好する人生によつて昨年八月演劇班が誕生いたしました。種々の困難と戦いながら、放送劇を始めとして着手したのでした。こうしてあゆみながら秋の藝術祭の行事の一つ學生藝能コンクールに初の間光をあげたのでした。班員の若い熱と意氣と努力と、それに今は本校を去つて縣の仕事に専心していらつしやる大出先生小林先生、齋藤先生、北島先生を始め諸先生の御理解と御援助に依つて、豫選に入選したのでした。來年も今年の經驗を生かして榮ある藝術賞獲得に努力する事をちかつて已みません。

圖書部から

戦災學校である本校では、樂しく讀書の出来る圖書室の新設は全生徒の念願であつた。その念願が漸く達せられて、本年度早



早 春 譜

早春

ふと窓から見ると
鳥の上が踊りかえされて
大い銀のあとが
生々しく残つていて
新しい土の色の鮮かき
そのむせる様な匂い
誰れかきて耕したのだらう
春が來たとわたしは思つた。

冬

みなさん！ 學びなさい
二度と返らぬ學生時代、思ふぞんぶん學びなさい。
學べ、學べ、此れぞ我が生徒の本分だと思ふ。

思うがままに

遊ぶのは學生時代だとみなは言う
だが私はぜつたい違ふと思ふ
なぜならば、遊ぶ事は何時でも出来る
だが勉強は學生時代にしか出来ぬから常である。
下級生のうち早く卒業したいと思ふ
そして自由自在に遊ぶ、時をおします
其の中に刻々と時は流れる……
何時しか卒業が目に見えて來る
そこで初めて我に返り
一目散、守時をおしき學びに精をだす
だが時すでにおそし……明日はもう卒業

高二 渡邊 幸子

寂寥の夜、灰色の地にもたれる星の冷い輝きよ。
闇のなかに、底力強くまたよき
凄い瞳を、暗いすべてのものに光らせて
歌唄う狂女のように、すどく
わたしをみつめる。
ああ、いま、わたしの心は恐怖に満ち
小鳥のようにふるえるのだ。

夕暮に

高二 武井 幸子
うすら寒い心を抱いて、落ちゆく日の終り

々圖書室が本館二階に設けられることになつた。何分誕生早々のこととて、設備も不十分で、圖書の數も少く、ほんとに貧弱でおぼつかしい次第であるが、今後この生れたばかりの圖書室をみんな愛し、高等學校の圖書室として恥づかしくないものに育て、行き度いと思ふ。
私は圖書室經營上氣のついた希望の二三のことを誌して参考に残して置きたい。
一、圖書の數をもつと各方面に亘つてふやすこと。
二、上級生も下級生も利用出来るように書物の程度内容を考へること。
三、いつも開いて置けるようにすること。
四、日曜其他の休日にも開くようにすること
四、貸出し制度をとつても弊害の起らぬ工夫をすること。(高松ナユ)

○球部報

終戦後再びスポーツが復活して参りました。その中で縣内スポーツとして卓球が盛んに行われ、本校に於ても各先生の御熱心な御指導と卓球部員の熱心な努力によつて、各方面の大會に出場し、立派な成績をあげて参りました。特に十一月十四日の足利工業學校に於て行われた私立學校懇親會の卓球大會には、次のような成績で惜敗し二等賞を獲得しました。

- 第一回戦 本校——第二女商
第二回戦 不 戦 勝
決 勝 月見丘高校——本校

出場選手 森田、板橋、齋藤、中山、川上、小林
今後尚先生の御指導を仰ぎ、在校生の皆様どうか本校卓球部の爲め協力して下さい。(板橋記)

保健班

明るい静養室にきれいな醫療戸棚を備えていつも病人に好感をもつて頂くように致しました。病人が案外少なくて閑散としておられます。然し月曜日はお休みの食べ過ぎが祟つて續々病人が出來ますことは考えねばなりません。今度新任の齋藤、倉松先生をお迎へ致しまして心強くなりました。兩先生の御指導のもと、いよ／＼保健班も活躍致します。
どうぞ皆さんも疑問の點等ありましたらどし／＼御質問下さいまして、強い体を作り上げるよう努力致しますよう。

美しい梅の花を窓下に見て、本校文藝部と演劇班を振り返つて見る。粉刺、虚脱の灰塵の中より立上つた文藝部員を先驅者と

に、夕霧の流れる如く私は歩む。
甘い香りか
冷たい無言か
夕べのせわしいなか、不自然に私の後をつ
けてくる。
灯よ。

哀愁の、歡喜のメロデーよ
急に、静夜を破るように私は光に向ける
瞳を
乾いた唇を
風のいたずらか、それとも長い虚榮の疲れ
でか。あたかも彫刻の如く……
それとも、昨日知つたつまらない謠で、私
の唇は永久に閉じてしまつたのかも知れな
い。
「瞬き」
ああ、私の何處かで叫ぶ、理性の内陰され
た新しい力が、
立て、進め、お前の思ふ如くに
燃える如き情熱で、與えられた運命を、
感傷より脱して新しい灯をめざせと。
過去を
現實を
そして未來を
ああ、私は恐ろしい嵐の夢をみるかも知れ
ない。
でも、私は何時も何時も夜を戀うのだ。

空
冬晴れの空は
天の向う遠見え透く様に青い
秋です
いつぞ海へでも
飛び込みたいような――
福壽草
中一 野島 時子
春を待ちきれず
庭に咲く福壽草の花
それは
みんなの心を明らかに
ひとりぼつちの淋しい時でも
この私をなぐさめる
可愛い福壽草の花よ
今日も私は
庭で一緒に本を讀むのです。

人 生
高一 三宅 俊子
青い鳥にかこまれてうたつた
幼い頃の姿よ！
ああ、あのような日が何時来るであらう。
でももう青い鳥は私にない
しかし私は未來を夢みながら
訪れる春に憧憬して力つゞくの限り生きぬ
ころ。
冬晴れの空は
天の向う遠見え透く様に青い

亡き姉に
高二 關口 久子
貴女は美しかった。
いまもなお、私の耳にやさしい聲が聞えて
くる。
私を呼ばれる聲が。
幼ない頃の夢のようをおとぎ話が。
いつもやさしかった貴女。
けれど、七年前の今日の夜、
貴女は星の國へ旅立つてしまつた。

冬夜の踏切り
高二 横島 サワ
ああ、貴女の瞳のように澄んだ明るい銀の
星よ
なんと寂しい夜なのだろう。
赤い灯がゆら／＼と
部屋の窓からもれて来る
清く白い満月が
細く長いレールを
冷たく照らしている。
雪
高二 大橋 キイ
田舎の田舎に冬が来た。
雪がぼつ／＼降り出して
裏の小川の川べりの
枯れた雑草も眞白に
野も山も眞白に
うづめつくしてまだやまぬ
何時まで降るかまだやまぬ
お前がふつてよることばは
小さい子供に子犬だけ
猫は婆さんと
こたつでまるくなつて
何時までふるか、まだやまぬ。

クリスマス
中二 高橋 キク
窓ガラスに大きな息をふきかけて
指で字を書きました。
字をすかして高い空が見えます。
眞晝の陽が字をおして私の胸へ流れてき
ます。
窓を開いたら、青空にかゝる一點の雲え
私の魂はぶつかりはしないでしょうか。

眠れない夜
中三 内山 梅子
眠れない
眠れぬとすれば
なぞ目がさえて来る
仕方なく私は
ぼんやり何か考へる
寝返りを打つた姉は
何か分らない事をつぶやいて
また軽い寢息
でぐつ／＼と眠つてしまつた。
カッテン／＼
時計の音がいつもより大きく耳にひびく
窓の外では夜風に
ざわ／＼と
黒い木々の梢が
ゆれている
「ボーン」と何かの悲しげに
響く氣笛
わたしは目をつぶつて又
眠れぬと努力をつづけた。

追憶
中三 渡邊 紀久
秋風と共に心の奥底まで
しみ／＼と想いは深まる。
樂しかつたあの頃！
若者の額には汗がにじんでいる
海を愛する彼のまなこのそのおおくに
希望と平和を私は見た。
すべての苦痛もすべての焦慮も
今は消え去ると唯一人息をのんで
海を見つめる
たくましい赤銅色の兩腕を高々と上げ
潮の香を一ぱい吸いこむ
やがて日も暮れよう
若者はいつまでもじつと見つめる
地平線の彼方を。
はるかないこひ
小さな漁村にいつもながらこの夏が訪れる
去年の香がにおう。
思い出が松林を霧の様におりて来て
あい色の中に誘ひ込む
あわれな魂私よ
思い出のひたり
悲しみや夢もぬらし
昨日の苦痛を捨て給へ
海の地平線のあなたから
むく／＼と白い雲が近づいて来るではない
か
青い空の下に
彼のしづきが光る。

朝
高一 渡邊 操
吐く息も白く
さく／＼と踏む霜は 心地よく
朝の挨拶と共に朝日にとけ去る
枯れ芝の間から
ごらん
若芽が首をのぞかせているよ。
ゆりの花
中三 白井 壽
黄昏の街角に
淋しく微笑むゆりの花
泥水に落ち
誰れも振り向きもしない
捨てられた
哀れなゆりの花。
その時
スマートな夫人がひとり
通りかゝり
その澄んだ大きな瞳が
純白な花辨に注がれ
ためらいながら
ふるえる手を出して
胸に抱いた
につこり微笑みながら……
あ、
忍びよる黄昏に
街角から消え去つたゆりの花よ
幸福が静かにいま
ゆりの花を包んでいる。

冬晴れの空は
天の向う遠見え透く様に青い

雪
高二 大橋 キイ
田舎の田舎に冬が来た。
雪がぼつ／＼降り出して
裏の小川の川べりの
枯れた雑草も眞白に
野も山も眞白に
うづめつくしてまだやまぬ
何時まで降るかまだやまぬ
お前がふつてよることばは
小さい子供に子犬だけ
猫は婆さんと
こたつでまるくなつて
何時までふるか、まだやまぬ。

眞實の住む國
高二 木下 キク
たん／＼として田舎の路はどこ迄も續いて
いる
その極みは山かしら、それとも深い谷かし
ら
山の彼方の空遠く幸住むと人は言う。
では行つて見ようかしら……
いや、行かない
私の理性は行つてはいけないという。
そうだが、やつぱり行かないでよかつたわ
何故つて、たつてだれも彼れもたい美しく
着飾つて
無意味に宙に浮いているんだつていふもの
矢張り華さはなくても眞實の住むこなたの
國が美しく、住み良くて無難だわ。

ゆりの花
中三 白井 壽
黄昏の街角に
淋しく微笑むゆりの花
泥水に落ち
誰れも振り向きもしない
捨てられた
哀れなゆりの花。
その時
スマートな夫人がひとり
通りかゝり
その澄んだ大きな瞳が
純白な花辨に注がれ
ためらいながら
ふるえる手を出して
胸に抱いた
につこり微笑みながら……
あ、
忍びよる黄昏に
街角から消え去つたゆりの花よ
幸福が静かにいま
ゆりの花を包んでいる。

クリスマス
中二 高橋 キク
窓ガラスに大きな息をふきかけて
指で字を書きました。
字をすかして高い空が見えます。
眞晝の陽が字をおして私の胸へ流れてき
ます。
窓を開いたら、青空にかゝる一點の雲え
私の魂はぶつかりはしないでしょうか。

隨感隨想

高 二 關 根 照 子

人生の春である私達にとつて、希望こそ、その生命であろう。春日郊外に出て、山野の生い立つてゐる草木をみよ。霜の下に黙々と春を待つた事もはや、過去の事なり、新緑滴るばかり何れも生氣に富んでゐる、希望として理想と云うものを持つてゐることは私共學生にとつて、又、大切なものである。元氣旺盛に希望に満ちる春の自然のようにならぬことこそ將來のため良き實を結ぶ糸口ではないだろうか。又、誰しも理想は高遠なものである。大政治家、そして大藝術家、大實業家等々もかく憧憬する、しかしその心掛を常に忘れずその境遇を開いて行くことこそ、夢に描く我等の希望であろう。

人間には希望というものが故に、それを實現するために行くのである。常に希望ある人こそ幸福である。何故ならば平凡に希望を持たないで生きていけば、なりゆきにまかせるばかりはあまい。憂鬱の陰雨がふり続き、意氣銷沈して進取の力を弱めるであろう、難事に直面して失望落胆しては、今の社會を改善し進歩の果實を實らす事は出来ないことは云うまでもない。人生の行路と云うものは簡單な様で、いや／＼複雑極まりないものである。私達眼前には、山の様な深い多望な前途が横たわつてゐる、我等はこれに向つて前途の光明を求めつゝ邁進すべきである。希望！希望、何と輝やかしい言葉であらう。私の愛する希望こそ、私共をして進取的勇氣を失わせぬものであらう。

運命
運命

何人も運命を豫想することは出来ぬ。もし出来るならば希望も楽しみも努力もあるまい。人々は漠然たる未來を夢み、その幸福を祈りつゝ現實の苦しさ耐え、人生の喜びを味わつてゐるのである。不治な病に悩む人は、唯何の抵抗もなく命數を肯定し、人生の喜びも感ぜず淋しい人生を送るのであらう。

愛

中 三 酒 卷 ケ イ

愛とは一休どんなものであらうか。本當の愛は美しいと思ふ。私は本で「人に愛される事は幸せです。しかし人を愛する事はもつと幸せです」と云うのを讀んだ事がある。何と云う美しい良い言葉であらうか。人を愛する事が幸せである。と云つても自分達の事はかり考へて人を愛する事はなか／＼出来なない事である。これも人々を愛する事の一部分であるが、去年愛の運動として共同募金をやつていたが、それを避けるかの様に反對の道を通つて行く人も少くないなかに立ち止つて、そつと入れて行く人もある。この様な人を見ると、本當に心が暖まる思ひがした。終戦後は戦争中自分の事だけにしか手が廻らなかつたのが習慣として抜けきらないせいか、人々に對する「愛」が大分薄れた様である。しかし愛こそ平和の源であるよりどころである。「けんか」だつて「戦争」だつて人と人との間に、民族と民族との間に愛の薄れた時に起る現象である。日本中の人々が、いや世界の人が互に愛し合つていたらいつ迄も／＼平和が続くであらう。私は人を愛する事の出来る暖かい心と寛大な心を持ちたいものだと思ふ。

運命

中 三 安 達 千 恵

或る者が宴會に誘われて、それが宿命的饗宴になるのもその人の生れ乍らにして持つた運命の路の一つの道程でしかない様に、人間は生れるとすぐ運命は定つてしまふ。この様に定つてゐる運命がどんなものであるか、私達は知る事が出来ないそれは悲しみか、苦しみか、あるいは幸福か、しかしそれは平凡な人であつても、いかなる聖人であつても、それを知ることが出来ないであらう。だが私はそこに新しい事を知つた。それはいかなる聖人でも知る事が出来ない運命をかるゝと解し、そして生き乍らにして、神様であることがめられたる人のあることである。しかしこの様に知る事の出来ない運命がわかるのは、何にしても人間には縁遠いものといわなければならぬ。まして易者や手相に、人間の一生がわかるはずがあるか。もしわかつたにしても、それは單なる氣やすめにしかすぎないものである。人間は手相見の言を聞いてか自然運命を左右する事は出来ず、定められた運命の河原をさまよい行くのである。しかし人間は胸に希望を抱いてこそ人生の生甲斐を感じるのである。人がこの世に生れたと同時に定められた運命と同じように希望も生れた瞬間から抱いてゐるのである。人は運命に生き、そして希望に生きて行く、もし運命にだけ生きて行つたであらうか。その者はどんなに暗澹たるものであるか。だがその暗い運命に希望を持つたならそれはどんなにか幸福な事であらうか。どんな難儀があつても悲境のどん底に陥る事があつても、それにまげず前進して希望の光を見出し、それに向つて眞一文字に進んで行く。それでこそ人間は万物の靈長なのである。

「父と子」を讀んで

高 二 菱 沼 ヒ コ

「父と子」を讀んで、私の脳裡に映り感じたことは「父と子」と云う題名の示す如く、舊時代と新時代との間に免れ難い相違、信念の衝突があるという事だつた。即ち舊時代の人々は新時代の人々におくられるのを恐れ、あらゆる方面に於て懸命に努力するが時代の感覺の相違はゆるさず、ついに老人は老人の道を辿り、新時代の人々の歩みを眺めてゐるに過ぎないのである。新時代の人々は、そうした舊時代の人々と入れ代りになつて進歩向上して行くのである。かくて世の中は常に古いものが去り、新しいものが出来て来るのだ。

こゝに青年は理想に生きる壯年は現在に生きそして老年は過去に生きることを痛切に感じ、私達青年期にあるものは老年の人々が注意をしてくれ、ことに耳にもかけぬ等と云う事なく自分の経験からおして注意をしてくれ、ことなのであるから、老年の人々の云うことをよく理解してつと／＼理想を高く持ち、その理想を少しでも現實化させるよう努力せねばならないと思ふ。

人の美しさ

高 二 阿 部 フ ジ

大自然に親しみ、大自然を自覺し、自己の本来の姿に立ち歸ること―私は一日中に少なくとも一度現實の世界からはなれ無縁と永遠に就いて考へて見る事は私共の心のために必要だらうと思ふ。朝晴々しい氣分を持つて大空を見上げた時、柔かな眞晝の陽光を背一杯に浴びて草に伏す時、又今日一日を感謝しつゝ、遠い山の夕雲を望む時、實に若々はあらゆる憎悪、あらゆる欲望、邪念を忘れて自然の懷に抱かれて自然に還り、人間本来の眞實さを取り戻す事によつて、始めて私達は精神

トルストイの生きる道について

高 二 中 島 壽 美 枝

トルストイが今日敗戦後の日本に於て、就中デモクラシー下の日本に於て最も親しまれる事實、私も心から親しめるものである。それは如何なる事に起因するのであらうか。キリストの人間平等論的な根底こそ彼の持つ偉大さであり、吾々が常に心の中心でも云い得るに足るものである。即ち生きる道に於てその中心をなすものが自由平等論であり、神への奉仕によつて魂の神土を得る思想である。悩める者の爲に神への相對的論理性から更にその道程を理論づけ魂の救済をなすに足ると考へられる。人間は神に近づくに従つて罪の多いものである。そしてその罪を悟り得た時に、人間としての眞の道を獲得するであらうと云う極めて汎神論的色彩が濃厚である。

人間が日常生活の各般についての強い彼の信念と彼の神土とを貫く所に私は彼の本當の偉大さを知るものである。

人 生

高 二 人 見 ミ キ

人生は苦しく悲しい、そして楽しい。人間は生れながらにして孤獨であり、一切の孤獨なるものが集つて自然界の壯美を創造し、社會に於ける人生を創造するものである。過ぎ行くものは懐しく又美しい。人は死ぬ、死んで美しき詩となり、涙となるものである。死は平凡な眞理である。しかしこれ程人々の胸に恐怖を抱かせる現實はあるだろうか。

月は親しみ深く人々の心をなぐさめてくれる。月は太古より今日まで同一の姿であるが、眺むる人の心によつていろ／＼に變る。双の様に射透される霧夜の月。朧夜の花影に眺める月。如何に私

修養の階段を一步進める事が出来るのである。種々の邪念によつて曇らされた心の鏡は、そのまゝでは到底姿を寫す事は出来ない。修養とゆう見地から見ても、最も大切な年齢にある女性は、斯様な事は夢想だにせず、唯ぼんやりと過してしまふのだから。或いは一步退歩して邪道へと踏込んでしまふか、この時に少なくとも、一日に一度天地大自然に住み悠々と人生を思い、永遠を考へて見るだけの心がけは、我々にとつて必要なことだと思ふ。私は吉田三郎の感想集「木に凭りて」の中「聲なき土」の一節に次の様な事を書いてあるを見出した。

「悪意があつてではないが親切な心の足りないために對手の心を傷つけると云うことは悲しいことである。沙翁が万人の心を持つた人と云われるのは、親切な心の人であつたと云う意味にも取られる。藝術とは要するに親切な心の記録ではないか。人生に對して親切な心を抱かないでどうして藝術が生まれよう。人を憎む時、人を呪う時、大抵私達は親切な心を失つてゐる。親切な心を持たない時、私達の言葉は御座りになる。私達の見方は唯上つ面だけになる。こんな人の藝術は無理に飾りたてられては居るが、何の滋味をも持たぬ。風眼をも持たぬ。人格とは親切な心のあらわれではないか。人を尊敬すると云うことはいゝことである。然し尊敬する心を起させるものは親切な心ではないか。親切な心によつて私達は始めて、人の美しさをも、尊さをも知るのではないか。自分自身にも最も責むべき物を見出すことによつて謙虚な心を抱かせるのも親切な心ではないか。」

私は夜の更ける迄こゝを繰り返して讀んだ。そして何か偉大なものを掴み得たことを悟り靜かに床に就いた。人格の根底は親切な心である。人を憐み人を尊ぶ心の存在しない人間は、どんなに偉そうにすまして見ても、善人には見えぬものである。

頭

齋藤 磯

一輪の花と私

田内 侑

巢立ちゆく教へ子たちに與う

北島 貞男

「ひめまつ」も第三集を迎えた。何か書いたらと云われたのだが、僕の貧弱な頭からはどう逆立ちしても、脳味噌の構造を變えない限り出そうもない。どだい僕の頭は親からつけて居ろよと云われて頂戴したのだから仕方なし、着けて居る様なもの、何十年も使つて居る内に大分きたなくなつた。色々とトラブルに出逢う度に、いつそ新しいのとチェンジしたらと思ひ、又何處かえ置いて行かうとも思ふのだが、取りはずしの出来るものでもなし、よしんば出来たとしてもよくく／＼考へて見れば、頭のついて居ない身体なんて凡そ意味ない。第一格好がつかない、止むを得ず今まで大切に保存して居た様な頭だ。いざ鎌倉と云つても、直ぐに必要なものを引つぱり出すなんて器用な真似は出来つこない。まあ辯解は別として「頭」と云う字は妙な字だ。豆腐に頁と書いて「あたま」と讀ませる。何か豆に關係があるのかと思ふとそうではないらしい。そこで僕一流の解釋をして見ると、之れはどうも讀書と云う字らしい。良く本を讀め、判るまで何回でも讀めと云う事らしい。即ちまめに本を讀め、そろすれば頭が良くなるぞと云う意味だろう。まあ餘り馬鹿な事をやめて僕も一つ本を讀んで利口にならう。折角貰つた物だ、一生可愛がつてやらう。

何んの飾けもない机の上になにも知らない純朴な姿を小さな一輪ざしの中に幸福そうな姿を見せるともなくみせている
その姿。
世のけがれも知らないで何時みても美しく落着いたその姿こそ誰にも好感をもたれ愛され、したしまれる
その姿。
その姿に！
あゝ一度でもよい一瞬でもよいその姿の持主になつて見たいそれは努力だ
しかしそれは無理と云うものかどこかであきらめよと
聲がする。
二四・二七
二四・二七
片庭にほころび香る梅見ては
春かともまがう如月の朝
二四・二三

別れ行く子等に幸あれ恵みあれとひたすら我は祈りつゞけむ
別れゆく子等の面影忘れめやその瞳の澄みて戀く見ゆるを
あなみじ心の丘に虹立ちぬ業卒えしそのよるこびの朝
陽炎のもゆる野に立ち若き子は高き希望に心おどりぬ
よろこびかおそれかあわれかなしみか世にいまする子は心みだるゝ
いかばかりうれしがるらむ業卒えて巷の春に出で行く子らは
いたずらに感傷の子となるなれ我見失わずわが道を往け
かわらじと互に誓う友どちのその言の葉に誠實あらしめ
みちのくの松島めぐり忘れめや六月の空六月の海
柳ちる庭のベンチに凭りながら語りしことも忘るるなゆめ
今更に悔むもおろか我が訓肝にしみ入るものもあらく
世の變遷いかにあるとも國を思い親をおもう道にかわりあらせじな

== 南天の印象 ==

高一 關 秀子

片隅に飾りし南天白壁の前に置きなば色増しにけり

高一 増山 さわ子

父戀いて門出に立ちし幼子え冷たき風は赤き頬うつ

高一 中山 敦子

野に山に小春日よりのピクニックみやげは野邊の愛らしき花

高一 大根田 幹子

空にまた夕立雲の現われて庭の草木も涼しくゆれる

高一 吉澤 和子

散る花も生きるも花か野邊の草我が行く道は愛の一道

中三 齋藤 ミドリ

朝もやに遠ざかり行く家並より浮び出ているコスモスの花

高一 増淵 リツ子

六疊の部屋の片隅唯一人讀み書き盡して友戀いしかな

中三 木下 靜江

支度して學びに行かん今日も又すだち行く日の心思出

高一 高橋 公子

裏庭の垣根のきわにゆれえたる愛らしきかな菊の一枝

高一 柳生 昌子

移り來て里より來たる封開ければ母の香いや戀しかるらん

高一 柴原 シゲ

孫の子の晴れ着姿を眺め入り笑み給うなり老いを忘れて

高一 山崎 みどり

温室にしおらしく咲く菜の花の影に金花草ほのと薫れる

高二 田代 友子

大空をひとりみて居る淋しさを慰めるごとと燕飛びいる

中三 福田 カツ子

雪どけの山の手道の赤土にしみ取られゆく薄き日の影

中三 阿部 千恵

叱られて泣く妹を抱きしめて頬すりしつゝ我も泣きけり

中三 小堀 マサ

さびしげに母の名呼べる弟の小さき口に白き齒を見る

高二 若松 里子

風吹かず眞晝日浴びて土起す父の笑顔に汗ぞにじめる

高二 須藤 キエ

山仕事疲れて思う學舎も残る日わづか悲しかりけり

中三 小野 満子

秋さりぬ友の形見の爪と髪三年経しも逝きしと思えず

高一 葭葉 君子

紅き花我れ手に取りて眺めける夜更け渡る霧の窓邊に

== 明るい庭 ==

初雪や枯木明るき庭の先
 夜の鳥や一しほ悲しみぞ来て
 寒梅やそつと手折りて土ぬくし
 終りたる朝の掃除や金魚鉢
 くみあげし水のぬくみや冬の朝
 お餅つき音もたから垣根越し
 冬の夜松高々と月寒し
 小春日や猫が背のばす日向かな
 キャンデーをくわえた子等の顔黒し
 枯れ枝にゆれて七色くもの糸
 麥を踏む影ながくと日のくれる
 あげひばり大きく舞えよ倉の上
 みづとりの羽音つめたし冬の朝
 元旦や山明けかゝる雨の中
 庭先の枯れたる菊に初しぐれ
 秋雨や風呂焚く煙り軒に這う
 春浅し日輪動く雲の奥
 國の幸祈りそなえし鏡餅
 庭すみに虫おさまりて秋深し

- 中三 眞木 芳枝
 高二 高橋 キイ
 高二 古澤登美子
 高二 上野ヒロ子
 中三 安倍 一枝
 中三 高山 ふく
 高一 加藤シゲ
 高一 中山 敦子
 高一 大塚 智子
 高一 桑原 治江
 高二 橋本三千代
 中三 平田 宮子
 中三 大垣 順子
 高二 手塚 美知
 中三 除村フミ子
 高一 齋藤 彌生
 高二 館野 愛子
 中三 關根 保子
 中三 渡邊 正江

サクと踏む霜や男体よく晴れて
 霜の朝一羽の雀わらを巢に
 歸り道月も勵ますアルバイト
 霜ばたけ青葱ほればにをいけり
 落葉たき秋の名残をひとしをに
 ねしすまる冬の夜更やわらべ聲
 羽つきに日ぐらし遊ぶあねいもと
 大空に冴えたる月や風寒し
 一本の木影遠しや田舎道
 垣の菊折る二の腕に露しづく
 茶柱に心あたゝめ夜寒かな
 かつぎ行く鉄輝けりとんぼ飛ぶ
 病人の爪美しき火鉢かな
 麥踏むや背に日輪の影焔る
 梅一輪咲いて納屋にも松と竹
 残雪や風にころ／＼枯落葉
 日は落ちてどんより静か秋の沼
 池の端南天 赤し薄氷り
 初句會お供へ餅のある座敷
 鳴きもせず百舌の尾動く梢哉
 あげがたの寒林つらぬく汽笛哉
 さら／＼と竹に雪音の寒さ哉

- 中三 齋藤 三千代
 中三 石川 サク
 高二 市村トミ子
 高二 豊田 初江
 高二 小堀 サト
 高二 齋藤 マキ
 高一 小島 政子
 高二 鈴木 峯子
 高一 池田 和子
 中三 青山カヨ子
 中三 早乙女 俊子
 中三 坪山 正枝
 中三 北爪 カツ
 高二 田中 キイ
 中二 小澤 しげ子
 中二 相原 篁子
 中三 宮川 美子
 中一 新橋 美知子
 中三 森 綾子
 高二 長谷川 フミ
 中一 飯塚 千重子



== 作文教室 ==

楳子の花

中三 鈴木 正子

「からたちの花が咲いたよ、
 白い花が咲いたよ。」
 姉さんは、良く仕事の暇々に、この歌を
 私に歌って呉れた。讃美歌の様な、静かな
 調子で歌い出すと、何時の間にか、その威
 厳に打たれてしまい、一人で美しい白い
 からたちの花を想像し、又姉さんが此の花
 の精の靈にも思われたものだ。斯うして樂
 しい月日をすごしたのも、今では二年の昔
 になつてしまつた。それから間もなく姉さ
 んは遠い所へお嫁に行かれ、歌つて私を慰
 めてくれる人はいなくなつてしまつた。か
 らたちの下で泣いたよ……見知らぬ花の
 歌を今ひとり小さく歌へば、遠いやさしか
 つた姉さんを思い出され、何ともいへな
 いなつかしさとらわれるのだ。

心は空想に満たされ、理想に燃える。鬱々
 たる氣持もいつしか吹拂われて、人生が明
 るくなる。だがどんよりと雲の垂籠めた空
 を見ると何ととはなしに心も暗いものに蔽
 はれて来る。青空を仰ぐ時とは凡そ反對な
 氣持が襲つて来て、思わす胸組みでもした
 くなるような寂寥とした感を覚える。
 空にも日に依り時に依り晴曇が有る様
 人の心にも亦時に依つて明暗が有る。
 空と心との間には何かしら切離せない關
 係が有る様な氣がする。曇つた日には何で
 もない事にも妙に塞ぎ込んでしまふのに、
 澄渡つた大空の下では、どんなにつまらな
 い事にも何ととはなしに微笑みが浮んで來
 る。空にも色々有る、その中で私達の最も
 愛するものは日本晴の空だ。心にも色々有
 る。その中で私達の最も望むのは澄切つた明
 るい心だ、一點の雲も無く澄み渡つた大空、
 それは正に私達の心の師であり修業の友で
 ある。

青 空

高一 増淵 榮子

グラランドのベンチの上で陽光を浴びつゝ、
 眞青に澄み渡つた大空を仰ぐ時、私達は何
 かヒナ／＼した躍動的なものを身を感じる

春の訪れ

中三 柏崎 千代子

どこから開えてくるのだろうか。あゝ、そ

木 枯

中三 關根 保子

それは何であろう。言はずと知れる数多き小
 鳥の囀りやきなのである。今迄はまるで獄舎
 の中の囚人の様にうづくまり、だまりこく
 つて霜だらけの屋根を、かた／＼とあられ
 ても降つてくるかの様に懐えていた彼女。
 やがて春は訪れ、高く彼女は舞ひ上りこれ
 を見ていると私達の体迄も浮上る様な氣持
 になる。又その反面に於いては開近の卒業
 なつかしい教室、立派な先生、良いお友達
 と別れなければならないと思つと、日一日
 の暮れるのが早いように感じ、又淋しさが
 胸にしめつけてくるのだ。
 「あゝ卒業」二度とこの卒業は來ないの
 だ。と私の口から湧き上つてきたこの言葉
 あゝ、私のこの心も知らずに今陽は西の空
 をうす赤く染めぬ山のもとに沈んで行くの
 だつた。

或る町はずれの長屋に、まづしく日々を
 送つてゐる家があつた。かん高く泣きあめ
 く乳呑み子、そしてそのかたわらに身をう
 づめる母親、びよぶは、繪紙で綺麗に色
 どられてゐるが、家の中、一体が薄暗く、
 ロックの様に暗い電燈が、かすかに家の
 中を、暖めてゐるばかりだつた。生活の苦
 しい今の世の中をインフレに戦つてい
 るこの家の見るも悲愴な現場であつた。父
 は、古株の木工で相當のお金は取つてゐる
 が、四ヶ月も病の床に伏してゐる母の養代

にとられ、日常の食料を買ふのさえやつと
 の生活だつた。今日は朝から冷たい風が身
 にしみ、家事一切をやつてゐる輝枝は、身
 に縮む思いをこらへ、母のために、父の馬
 にと、一生懸命寒さと戦つてゐるのだつた
 學校は、一週間三日きり行けず、あとは先
 生にことわつて家の手傳いに働んでゐる。
 立派な親孝行の一少女であつた。輝枝は、
 中學三年在學中で、級では一、二を争う優
 秀な成績ではあつたが、餘りにも休みの日
 の多い事故、どうすることも出来なかつた
 朝は五時に起き、乳兒の世話と母の世話、
 そして父を仕事場に送り出すやら、朝御飯
 迄手の廻らぬようないそがしさを、神に祈
 り、佛にすがつて、一身に働んでゐるのだ
 つた。父も見かねてたま／＼自分でもやすん
 で看護してくれろのだつたが、輝枝にはそ
 れが一番辛かつた。父には心配かけたくな
 い、たゞ一生懸命働いてもらひたかつた。
 母の病氣は、なんだか今朝よりも悪化した
 様な氣のする程やつた顔、みだれた髪、
 本當に輝枝は淋しかつた。たゞ可哀想なの
 は母の傍に泣きわめいてゐる赤ん坊幸子の
 事であつた。親切に隣りのおばさんがめん
 どう見てくれるので、輝枝は涙の出る程嬉
 しかつた。今夜も冬をつめたい風は遠慮な
 くこの輝枝の家のトマン屋根にぶつかり、
 その度ごとにカタ／＼とときみな音を立て
 ゝ悲しさをあわれむかの様に聞こえるので
 あつた。暗い電燈の下で、輝枝は夢中にな
 つて勉強をすまし妹の足袋を縫つてゐると
 父が奥から飛んで來て、輝枝が醫者をた

「んてい」といつて隣のおばさん呼びに行つた。母は急に苦しみ出した。青ざめたかほ、そしてたえ間なくふるふる。輝枝は神よ〜と口に念じつゝ家を飛び出して、半道程ある警者へ一目散に走つた。その時の自轉車に乗れない残念さ、若し乗れたら十五分位で行つてしまふのに……。しつかりして頂戴い、がんばつて頂戴い、輝枝は夢中でふるふる体を、おちつけ〜と自分に叫びながら走つた。空を仰げば、月はこら〜と輝枝の心を知らぬが如くその冷たい光にさえ今は祈りたかつた。輝枝は何度も石につまづき、ころがり、手には血がにじんて来るのだつた。しかし齒をくいしばつて頑張りつづけた。しかしその時はこの輝枝の必死の努力も甲斐なく昇天して、こらとする母の魂はもうもたらなかつた。輝枝は急に前方の大きな杉の木上に母の幻が浮んだやうな気がして、「お母さん」と思はず叫んだ。もう聲さえ出ぬ喉を大きく開いて。

小技師プキちゃん

高一 増淵 ツヤ

親戚の子で「プキ」と愛稱されている利口な男の子がいます。名は利一郎というのですが「プキ」という渾名は無器用とい

の意味なのです。一体日本の封建的思想は男は無器用な方が偉い様な、誤つた考えに陥り勝つた。このためにどれだけ損をしたかわからないでしょう。わが「プキ」もそういう家庭に育てられて、「あいつは無器用だから……」「プキちゃんにそれを頼もうものなら……」など、何にもさせないのでした。だから彼自身自分は無器用だと思ひ込んで何もしていません。しかし風の糸目をつけなくては風は止げられないのです。けれどどうもくつする事が出来ないのです。お友達達が楽しく遊んでいるのを見ても風をあげたい欲望は激しく彼を揺り動かすのです。或る日とうとうお母さんに頼みました。「自分でつけないかい」「だつて、僕無きつちよなんだから」「何ですつておまえが無器用ですつて、そんなことはありませんよ、きつと上手に出来ませよ、お母さんの子ですもの」

成程お母さんは絹刺の刺繍や足袋作りが上手でした。現にプキちゃんはお母さんの作つたビロードの足袋をはいてるので「だつてだつて」とプキちゃんはねばつていましたが、お母さんは鼻を見向きもしていません。そして本人でもう一度試して見るまでは黙つて放つておいたのでプキちゃんも仕方なく第一の糸を結んだ時に「ホー上手に出来ましたね、その結び方がいゝのよもう一度やつてごらんさい」とお母さんがニコニコしてのぞき込みました。プキちゃんは半信半疑で次の糸目を附けたのですが、不思議にもつれもせず第三

第四と彼が爪をあげた時に感じたものは、「僕にもできる」という事だつたのです。それ以来プキちゃんは何でも作る様になりました。停電するたびに安全器をのぞいてみます。ラヂオ受信器が故障するとすぐセツトの中をのぞきます。そしてネジ廻しやスパナはプキちゃんの本部屋に次々とふえてゆきました。

今や「プキちゃん」という名は無器用の反対「非常器用」という小代名詞となりました。私は子供にプキちゃんを紹介し、以上のお話をして二人とももつと〜器用になる事をすすめます。二人とも嬉しそうに寫眞器や時計の部分品について知識を求め親戚から簡単な修繕なら引受けて立派に小技師の役目を果しています。

降雪の夜

中三 坪山 正枝

私はふとしん〜と身にしみる寒さを感じた。するとさらさら〜と何か戸にあたる音がした。「あら雪かしら」と私は心に感じた。そう思えば本當に雪の様である。急いで窓を明けて見た。電燈の光が其の何物にかあつた。そしてさらさら〜と光つて見えた雪である。白い〜清浄な雪も地面を眞白にしていた。けれどもまだ雪山はつもつてい

あけぼの

中三 小平 美子

一羽の雛が鳴き他の雛も鳴き出した。今まですべてが夜に〜とまっていた静かな村は今日朝陽めようとして。大きな爐には火が燃え、手拭を持ち歯ブラシをくわえて庭に出る。朝の風が非常に冷たい。冬枯の庭は類似的な趣を見せて、いつも腹い庭ながら向一層限らない霞を思わせる。朝の夜露に椿の花は軽くうなだれ、もも色の花辨がすかすかに動いている。洗面をすます頃には薄い朝露は次第にうすれ、東の空は淡紅色に輝き、西の空は黒みがかった銀色に染め分けられつづつあつた。やがて西空のなたには、男体の麗華が美しい姿を現わした。ほ〜とむかのように軽快な囀をた〜え、刻一刻宇宙は輝き明かす。雪をかぶつた野原の向うで、又雛が大きく時を告げる。高い〜いちよりの木の幹が光つて来た。その下のわら屋根が赤く燈をはき、その側の松の木の間ごしに、まばゆい光がすす〜と四方にさす。一秒二秒三秒、屋根の上に眞赤な太陽が微かに体を現す。周囲の群れ雪はなんと華美な色彩に色どられたことか。太陽は半分になつた！とう〜と尊いまで典雅な姿を現わして、徐々に地上へ華麗な影を投げかけながら大空高く上つて行く……。

しづく

中三 小島 孝子

雨上りの物干竿を見ると澤山しづくが並んでいる。じつと見ているとなか〜面白くない。楽しい学校生活と切りはなされ、思ひのみの道を進んで行くのもおそろしい。ボンボン〜と時計が九時を打つ。なんと淋しい晩だ。

淋しい夜

高二 若林 フク

落葉の散る秋も何時しか過ぎ、寒い冬！月日の立つのは早いもので、兄さんが出征してから早や六年、毎日どんな淋しい日も悲しかつた時、一日として忘れた事のない一人の兄さん、どうして死んでしまったのだらう。そんな事を考えていると、何時しかマブタが熱くなつて、そうしてあの儚い醜な戦争を憶えずにはいられない。

夜も一秒〜淋しく更けてゆく、私は唯一人庭に立たず月を見つめていた。どこかで犬の遠吠がする。この荒ぶる世界にも、又も新しい年を迎えて、早や卒業と言う日がやつて来ると思つと、一日〜送るのが淋しくてなら

美しい星

中三 神戸 歌子

何時だつたでしょうか、それは今迄私が小説を讀んだ中で、こんなわびしきを感じたことはありませんでした。その小説は「花散りぬ」という題で、つき〜に美しい場面、そしてあるキリスト信者の人達が正しく美しく生きる一念のもとにキリストを守りつづけて、静かにこの世を去つて行き、そして、その中の一員である月江と云う少女が静かに天に昇つて行く、その美しい少女が守りつづけていると云うならさじじいでもないのですが、この小説を讀んで行くうちに私は、何もかも忘れてしまいました。今迄くやしかつた事、こんな事はどこかえすつとんてしまいました。そして、この美しい物語に何かしら興味をひかれてしまいました。キリストを最後迄守り通してやがて天に昇つて星となつた月江と云う少女にたまらなく、あひたくなつてしまったのでした。

私は、そつと窓を開けて見ました。空にはこの様な美しい物語をひめていた様に無数の星が美しく輝いていました。みんな月江の様に、なつかしく、やさしく私の瞳に映りました。私はそつと窓をしめて、また月江の事を思うのでした。

光つた或一片の雪が、後の板塀にあたり下りの椿の赤味をおびてふくらんだつぼみをかすめ緑の濃い厚い椿の葉の上に落ちた。そして時が進むにつれて赤い南天が白い帽子をかぶり、その赤い顔が一層目だつて来るのであつた。

あ〜嬉しいと思ひながら窓をしめた。本當に静かな夜、何の音も聞えない。唯時々風の爲に戸に當る雪の音が気持よく聞えたり、机の上の時計の時を刻む音が聞えるだけ、その他はまるで此の地球上の何物も眠つている様な静けさだ。あ〜雪の夜の静けさよ。私は其の静かなあたるの冷氣を胸一ぱいにすつて床についた。

雨上りの物干竿を見ると澤山しづくが並んでいる。じつと見ているとなか〜面白くない。楽しい学校生活と切りはなされ、思ひのみの道を進んで行くのもおそろしい。ボンボン〜と時計が九時を打つ。なんと淋しい晩だ。

あ〜嬉しいと思ひながら窓をしめた。本當に静かな夜、何の音も聞えない。唯時々風の爲に戸に當る雪の音が気持よく聞えたり、机の上の時計の時を刻む音が聞えるだけ、その他はまるで此の地球上の何物も眠つている様な静けさだ。あ〜雪の夜の静けさよ。私は其の静かなあたるの冷氣を胸一ぱいにすつて床についた。



(童)

(話)

のんきなおばさん

中三 菱 沼 チカ

(一)
 のんきなおばさんは相變らず家を留守にしてお隣に遊びに来て居ました。お話しをする時でも、いやになるほどのんきそうな話しぶりなのです。ある時、小さい子供達を集めて話をしている時、突然裏の方から「火事だ」という叫び聲がしました。おばさんはのんきそうに道に出て四方を見廻した時、火事が自分の家であることを知つたのでした。のんきな顔をしたおばさんは、ただそこに立つたまゝ見ているばかりでした。しかしそのうちに消防の人々がそちらこちらから集まつて来て消してくれたので、少ししか燃えませんでした。おばさんは嬉しそうな顔をして家の中に入つて行きました。

(二)
 あくる日、のんきなおばさんは相變らず子供達を集めて昨日の続きを話しているのです。子供達は喜んでそのお話を聞いているのです。のんきなおばさんはこんな風に毎日をすごすのでした。

森の青葉

中三 相 澤 トヨ

それは、暖い小春日の午後のことです。お山の雪もすっかりきえて、小鳥も若葉の美しい木々の梢で楽しげにさえずっています。そして高い木の上でみづくの小父さんは日向ぼつこをし乍ら、メガネ越しに森の明星新聞を開いて感心し乍らひとり言をいっています。

「おや、これは感心。わしは、こんなに年をとつているが、この様な感心な話を聞いた事は無い。これは一つ皆の者に知らせてやらなくては」みづくのおじさんは、そばにあつた山ぶどうのつるを一寸引張りました。カラン／＼と鐘がなつて、あちこちから森の友達さん、りすさん、小鳥さん等が集つて来ました。「お、みんな来たな、今日は一寸相談をしようと思つて、みんなを呼んだのだが、この明星新聞にのう、隣村の猿さんともぐらさんが協力して荒地を開墾したという事が出ています。これによると、さるさんが草を刈り、もぐらさんがよく土をくづして、美しい草花の種をまいたんだぞうだ。それで相談というのはだ、この村でもまだ草のぼう／＼生えている所があるだろう。そこを少し開墾したいと思ふのだが」

するとみんなは「賛成々々」と大聲で叫びました。忽ちその開墾の案は決定しました。それからは大騒ぎです。毎日々々荒地の

開墾にみんな一生懸命です。特に小鳥達は、方々の村々を飛びまわつて綺麗な花の種を見つけてきました。

やがて夏が訪れ荒地には美しい花が咲き亂れ、樹々は嬉しそうに青々とした葉を一杯つけた枝を大きくはつて、小鳥は大きな聲で枝から枝と飛びまわり、森の仲間達は輪を作つて踊り暮しました。みんなの汗の結晶は、こうして美しい森、そして楽しい森となりました。

かわいい仔犬

中一 津村アイ子

うちの白ちゃん かわいい、白ちゃん
 いつもしり尾を こにこにさせて
 わたしにじやれつくかわいい、白ちゃん
 うちの白ちゃん かわいい、白ちゃん
 いつもじやれてはかわいい、聲で
 わんわん わんとほえたてる

二葉集

冬の夕

中一 佐々木悦子

葉一枚もない梅、櫻などいかに寒そうだ。
 びゆうびゆう木枯の風は吹きまくつて柿の葉がハラハラと散つた。
 もう燈火がつく時分、方々の家では電燈がかやいている。ポーポーと會社の汽笛がなつて、あとは水をうつたようにしづかになつた。お、さむいとふるえ聲で労働者が身をちぢめて寒さうに通つた。

この時、寒月はつめたい光を地上に下げた。

冬の星

中一 田中惠美子

風はつめたく私のほゝをうつ
 夕やみの空を見ている やがて星が一つ一つと見えてしだいにふえて空いつぱいとなる。
 その一つ一つの星を見ては、いつのまにか目に涙がいつぱいになり 遠くはなれたおばあさんを思いうかべ
 しままでも一つ一つの星を見つめている。

眠れない夜

中二 荒井セツ

しんと静まりかへつた真夜中
 眠ろうとすれば
 なお眼がさえるばかり
 電燈はほの明るい
 光をなげている
 わたしは

暗い天井を見ながら
 ぼんやりと何か考へてゐた
 夢を見ているのか妹は
 何かわからない事を
 つぶやきながら
 にこ／＼笑っている
 又軽い寢息で
 ぐつぐつと眠つてしまつた
 「ボン／＼／＼／＼」と時計の音は
 いつもより大きくきこえた
 外ではかすかに鳥の鳴く聲が聞えて来る
 わたしは めをつぶつて
 もう一度眠ろうと努力した。

待合室

高二 稻葉タカ子

人気が待合室で
 私は静かに時を待つ。
 孤獨な淋しさに身を包まれて
 私は淡い電燈をみつめる。
 頼りないその光を。
 すると、四邊の静寂を破つて
 客の一群が流れ込む。
 室は人間に世界に返る。
 みると、顔に幾條かのしわのある
 老人ばかりのグループ。
 背中に縞の風呂敷を背負うて
 中から眞赤な顔のリンゴが
 のぞいている。
 白髪頭に赤いかんざし
 ブカリブカリ美味相な煙草が
 ドーナツのように輪を描いて消えていく。
 私は呆然と片隅で眺めつづける。

藪 柑 子

やぶこうじ落葉の中に二つ三つ
 菊の花色とり／＼に咲きにけり
 テーブルのペラ一輪に友思う
 馬引きて木の葉さらひのいそぐなり
 竹やぶに小鳥飛びかう霜の朝
 菊たをれ竹垣足袋を干しにけり
 麥踏みやのどかに見える頬かむり
 元且や若水くんで雑煮かな
 初日の出男休山もうすげしよう
 門柳糸打ちけむり春姿
 さら／＼と竹の葉音のさむさかな
 餅つきや今日は眞面目な兄の顔
 お茶飲みをしているうちに除夜の鐘
 雨の晩今年去りゆく除夜の鐘

高二 半田 トキ
 高一 山崎 みどり
 高一 柳生 昌子
 高一 半田 菊江
 高一 遠井 公子
 高一 落合 孝子
 高一 増山 サワ
 中一 松崎 榮
 中一 荒井 美津江
 中一 飯塚 千重子
 中一 大堀 典子
 中二 柏崎 とし子
 中中 日下部 タケ子

一 口 話

中三 半田 初江
 お正月の日であつた。
 家の人は皆外出して私と祖母と二人
 きりで、祖母は何か見つけ物をしてい
 る。
 私はちよつと勉強の手をやめて、床
 ノ間のいけ花のそばに紙切れを見た。
 それにはこんな事が書いてあつた。
 或所に川が流れていた。そこへ靴が
 流れて来た、そこへきうりが流れて来
 た、きうりが靴の中に入つた。それで
 「きうくつ、きうくつ」と、言ひまし
 た。

童謡 北の風
 中三 田崎 和子
 一、お寺の社に鳥が二匹
 裏の畑に雀が二匹
 トロトロ北風寒い。
 二、お山は遠く縮帽子白
 田圃は遠く氷は堅い
 トロトロ北風寒い。

三、お月様東し西にお日さま
 坊やのホツベは夕やけ小やけ
 トロトロ北風寒い。

四、寺の鐘つき木の葉が落ちる
 ねんぬ坊やの涙が落ちる
 トロトロ北風寒い。

星
 高二 松倉 君子
 水波みする時ふと空を仰ぐと
 空は夜の世界でした
 まるで寶石を散りばめた様に
 きらきら輝いてまばゆい限りです
 「ツツツ」の星がじつと私をみつめていまし
 た。
 何時までも眺めていると
 自分の心が天國に行つてしまつたやうです
 何もかも夢の中に包まれて……
 ふと我に返つて夢の國より遠のいて
 ふた／＼び空を見つめると
 美しい星です。
 そして優しい瞳みで
 私達の世界をみつめています。

Love be all over the world

Love! What is Love in the world? It is a human treasure and an angel which would bring peace among mankind.

Everybody has the sence of love but not everybody is aware of the importance of this sence. As you know, the Christian religion that is called the Religion of Love tells us, "Thou shalt love thy neighbors as thyself". We have to keep ourselves always aware of the sence of love and look at others with the eyes of love, and you will be looked at by others with the eyes of love. Now that the prolonged war is over. People are seeking peace. But can we call the present condition peacefull only because we are not fighting? no. without love in our mind, there can be no peace on the earth.

United States has been victorious against Japan. When America were coming over, we Japanese were full of fear, because we believed that they would surely make us their slaves. As it was, however, we understood for the first time how benevo lent and gentlemanlike they were by seeingthem with our own eyes. Really, they have been generous enough to forget yesterdays hostility, Rind enough to guide us towards the building of a demovratic and Peaceful country, and charitable enough to supply us with an enormous quantity of food. Their kindness extend not only to Japan, but also to various other countries all over the world. I think you have heard of the friendshiptrin that ran to various European countries with quantities of hearty gifts from American citizens for the relief and consolation of the poor war-sufferers.

This is the love which will go everywhere even beyond the vorders. Who can say that there can be anyone not maved by a conduct out sincere love? Love can control the fiercest lion and make the devilry. However obstinate and crooked a nature one may have, or however cruel one may be, onse touched with love his mind will soon become as soft and as tender as a child's, just as ice melts awayunder the warm sunbeam. Only those appriiative others love, only those who have been moved by others love, can love others in the true meaning of the word.

Love is the very mother of all these virtues. I dere say the most important, but most laeking in Japan is Love. We eagerly desire to have a country of our own of high culture. But, when will Japan be one of the most cultural nations of the world? That will be only when Jall of apans' people succeed to have in their mind, "Love of Friends", "Love of native", Love of mother country", and "Love of the world". "The mutuael love of the World nations." That is the only way to the world peace. (End)

Masae. Kikuchi

黄昏の歌

小林 悠雄
 遙かな森から
 沈黙が赤みはじめる。
 凍てついた土くれが
 音もなくひび割れる。
 崩れゆく落日に包まれて、
 疲れ果てたかれは
 淡く、足もとから消える
 長い影法師をちつとみつめる。
 かれの混濁した思想は、
 時間の交錯する五次元の世界へと、
 哀愁の旋律と共に
 悲しく飛翔する。
 初音
 ありとあらゆるものは薄れ
 冷い風が ひょうひょうと吹きゆき
 山脈は 限りない空のふところへと
 逃れてゆく。
 枯れきつた草木は呻吟き
 路傍の小石は、寂しく友を呼ぶ。
 ああ
 露りゆく牛車の響きは高く
 孤獨を護つて

出 發

土 岐 榮
 この世の中にすべてより
 生きるべき意味と
 生きるべき価値とを
 自分の中から失つたとき
 私は最後の手段として
 心静かに黙想し乍ら
 死に對して用意する
 とこるが不思議なことに
 私自身の心の神は
 「自分というものに自信をもち
 勇敢にすべてのものに闘う時こそ
 絶望の中より自分を見出し
 將來の新しい計畫に
 再び出發が出来るのだ」と
 幾度となくひびいて来る。

母校ニュース

◆本校では来年度の新計画として特別講師招聘の発表をした。これはまことに劃期的な企圖であつて、特別講師として次の方々を委嘱御快諾を得た。

講師の方々の顔觸れでも明かなように、各方面の權威が網羅されており、女性の社會的公民的藝術的教養の水準を一段と高める上に多大の貢獻のあること、熱烈な期待をもつて開講の日が早くも待たれつゝある。

来年度からは一週に一回特別講座として華々しく開講される筈である。

◆もう一つ、来年度始めての試みとして、家庭の實際面に役立つ女子を短期育成する目的を以て家庭専門部を新設することになった。第一部、第二部に分れるが、兩部共主として和裁、洋裁手藝、調理、家政を重點的に履修せしめるが、同時に一般學科も課することにして、新時代の要望に應えようとするものであつて、一般から非常に歓迎されている。

◆特別講師

| | | |
|--------|-----------|-------|
| 時事問題 | 慶應大學講師 | 石川源八郎 |
| 經濟問題 | 東大教授 | 今野龍夫 |
| 農村問題 | 宇農專教授 | 井上雄 |
| 食糧問題 | 農林技官 | 藪光 |
| 醫學 | 前橋醫大教授 | 立石武 |
| 榮養科 | 縣衛生部長 | 加藤德 |
| 豫防醫學 | 宇都宮保健所長 | 藤井和 |
| 婦人科優生學 | 厚生技官 | 波邊敏 |
| 文學・社會學 | 社會教育委員 | 石川武 |
| 美術 | 日本畫家 | 手塚 |
| 工藝 | 辯護士 | 島田英 |
| 邦人問題 | | 加藤二 |
| 洋舞 | | 川上ヨ |
| 日本舞踊 | | 喜田彌三 |
| 英語文化 | 由利壽舞踊研究所長 | 若柳吉之丞 |
| 英語 | 通譯官 | 由利壽美 |
| 美術 | 老松美容院長 | 中山直 |
| スチロ | 元讀賣新聞學藝部長 | 中澤高 |
| 映畫・演劇 | 縣社會教育課 | 岡田雄 |
| 日本古典 | 縣社會教育課 | 岡田雄 |
| 編輯技術 | 「自治通信」編輯長 | 茅根 |

編集を終りて

◆ひめまつ第三號をおくる。

素人のかなしき、纏めてはみたものゝ、編集の不手際は推いかかすすべもなく、不体裁なものになつて申譯がない。

◆第三號は文藝中心の編集法を改めて、校友會誌としてつとめて各部の活動状況を収録することにしたが、平素の心がけが悪く、泥糺式に原稿を纏めた結果、内容的にはあまり満足すべきものにはならなかつた。そして分量的には依然文藝作品が大部分を占める結果となつた。次號には永くかゝつて自分で調べた研究論文のようなものどしどし寄稿されることを取んでやまない。

◆しかし四〇頁に増大した本誌では出来るだけ数多くのみなさんの作品を載せることに努めた。出来れば集まつた全作品を収めたいと思つたが、それは經費の都合で遺憾ながら實現出来なかつた。優秀な作品を数多く割愛せざるを得なくなつたことを悪しからず諒承して頂きたい。

◆本年度から新發足した高等學校は頗る好調に成育しつゝあり、来年度は高校三年生も出来て、完成した形に整い、設備の充實と相俟つて、その發展は期して待つべきものがある。本誌にも既にさうした胎動なり新聲なりがどの頁からもきこえて来るような氣がして非常に心強く感ぜられる。

◆今年の冬は非常に暖かきで、一月というのに校庭の梅は満開、詩情を喚ぶには十分であるが、何だか薄氣味が悪い、然し編集締切の今日は漸く雪が朝からチラつき、願調に戻つたやうで、いくらか不安も解消した。ひめまつの特光のよき瑞兆であるかのように感じながら降りしきる雪を眺めている。

◆終りにご多忙中を校長先生はじめ諸先生から玉稿を賜はり、本誌に光彩をお添へ下さつた事に對し厚く謝意を表します。(北島肥)

第三號

ひめまつ

—非賣品—

昭和二十四年三月五日印刷
昭和二十四年三月十日發行

須賀學園内

編集兼 北島貞男
發行人 小林悠雄

印刷人 中山泰吉
印刷所 株式会社三共社印刷所

發行所

須賀學園校友會文藝部

